

【研究論文】

宗像地域の古代史と遺跡概説

花田 勝広

1.はじめに

宗像地域の北側は玄界灘に面し、東側は三郡山地北端となる湯川山・孔大寺山・金山・城山の四塚連峰が遠賀地域と境界をなす。南側は赤城山の低丘陵群が鞍手郡へと連なる。西側の津屋崎には、対馬見山・在自山・宮地嶽の丘陵が伸びる。唯一の河川である釣川は、全長15kmの2級河川で宗像の小平野を南から北に流れる。福岡の西郷川流域は、小平野となり粕屋郡の低丘陵に続く。地形的には、釣川流域の平野部、西郷川の平野の2ブロックに大別される。

宗像の語源は諸説あるが、文身（身体に刺青状のようなものを入れる）に起因する説や江戸時代からの「空潟」・「沼無潟」の地理的要因説などが有力な説である。古代の遺跡は、海岸部に立地するものと平野部に立地するものに大別でき、玄界灘で一般的なあり方を示している。海岸部では、縄文時代以来の海を生業とする漁労（漁業）が中心となり、平野部では弥生時代以来の水稻農耕が経済の基盤となっていることは現在と変わらない。

しかし、古代においては主導的な役割が、移動性の高い玄界灘の漁労民と、脆弱な小平野の農耕民の間で変化する。その原因は、北部九州が朝鮮半島に近く、古代の朝鮮半島の人々の移動・文化の伝播・物資の移動が、本州島に伝わる門戸をなしたからと言える。この宗像の地理的要因が、海に生きる海人の活動に影響を与え、古墳時代に大和を中心に発生したヤマト政権の国家形成期に沖ノ島祭祀に見られるような、古代の宗像と大王家のつながりを緊密にしてゆく。このように、宗像の古代史を理解する場合、以下の二つの視点で、遺跡の変化、遺物の解釈をする必要がある。それは、①弥生時代から続く農耕文化の地域的发展のあり方を解明すること、そして②福岡平野などの周辺部からの影響やヤマト政権との政治的な影響で理解することの二つの視点である。

沖ノ島祭祀に目を奪われ、宗像を過信しすぎると、本質であるヤマト文化のマツリであることを見抜くことができない。本来の宗像の地域的发展を知るためには、①である地域の遺跡・遺物の検討を通して、その実態を知り、深めることが

大切である。このようなバランスのとれた視点が、この地域の正しい歴史認識につながる。

2. 古代地形と遺跡

2-1. 入海と釣川の形成

釣川流域は、現在平野となっているが、江戸時代には頻繁な洪水を引き起こしたことが、古文書から知られている。釣川の氾濫との戦いが古代からの農民の歴史でもあった。私も子供の頃に、台風で氾濫した釣川水系を間近に見たことがある。釣川の語源はよく分からないが、江戸・明治時代初期には江口川・田島川などの大字名が付いており、河川全体を示すものはなかった（西日本文化協会、1981）。また、史料や字名に釣に「ツル」のルビがあり、渡り鳥の鶴が語源かも知れない。ツルは、水路・水路のある低地を意味するとする考えもある。今後、詳しく調べる必要がある。

遺跡には、人の住む集落や水田跡、埋葬のための（墳墓・古墳）、生産をする場所（須恵器窯・鍛冶工房・製塩）などの跡が、発掘調査や分布調査で見られている。これらの遺跡を理解するためには、どこにいくつあるかを知る必要があり、古代の地形の様子を知らなくては、明らかにすることができない。

2-1-1. 縄文時代の入海

まず、下山正一「釣川平野の発達史」と題する画期的な研究を紹介する（下山、1997）。平野部でボーリング調査を行い、地下の地質資料から縄文時代前期（4700年前）の地形が判明し、海岸線が推定された。この成果によると、田島・大井・東郷・稲元まで、入海が入っていた。現在の高さで5m前後あたりになる。現在の考古学の知見でも、後の弥生時代の遺跡でも、釣川遺跡を除くと全ての集落遺跡が、この高さよりも低い位置に立地しているものはない。したがって、この研究成果が全ての起点となる。

2-1-2. 弥生～古墳時代の宗像湾

弥生時代遺跡を潟から立地を見ると、田島瀧ノ口、多礼コキゾノ、河東久戸、稲元久保、須恵クヒノ浦、三郎丸、田久、田久松ヶ崎、曲香烟、曲善王寺、東郷下ノ畑、東郷登り立、田熊石畑、大井三倉、大井池ノ谷、大井和歌遺跡などが、潟周辺に位置している。この内部が後背湿地や入海となるが、唯一向手丘陵の標高4m前後（推定）に立地する釣川遺跡が位置する。これらのことから、海退が進み田久北側、稲元南側、曲北側、東郷北側を中心に広域な入海は後背湿地を含め、大きな潟を形成していたものと推察される。集落遺跡から見ると最も低いのが、

5mの稲元下牟田遺跡（散布地）となる。

古墳時代の遺跡も、同様の位置で集落が配置されており、潟の干上がりは進んだものの、景観は変化が少なかったと推定される。集落の立地は、湿地縁辺から谷奥へ水田開発に伴い、分村集落が著しく多くなり、ほとんどの平野低地部に開発が進んだのであろう。そして、古墳時代の終わりには、山麓部に群集墳が造られる。

2-1-3.奈良・平安時代

律令期の宗像郡は、『倭名類聚抄』（以下和名抄と略記）により、「秋・山田・怡土・荒自・野坂・荒木・海部・筵内・深田・蓑生・津九・辛家・小荒・大荒」14郷が知られるが、半分の郷の位置が明らかでない（亀井，1998）。その郷名から旧宗像郡の範囲を超えて、遠賀郡の西側、粕屋郡の北側を含む領域と考えられる。したがって、古墳時代の宗像氏の勢力エリアがこの地域も含むと考えられる。

和名抄の郷名は、中世的郷名の成立で、分解・変化したものと考えられる。条里制の「坪」などの痕跡を留めるところは、曲・朝町・野坂などであり、潟より離れる小平野部となる。

古墳時代後期には、水田開発地帯と推定される。宗像市史で郷名と条里痕跡から、水田開発計画の時期が数時期にわたることが指摘される（亀井，1998）。一部、この時期のものが含まれる可能性もあるが、大半は東郷北側の一帯付近は鎌倉期以降ではなかろうか（日野，1967）。奈良～平安時代には、大宰府からの駅路が整備されるが、武丸大上げ遺跡の評価をめぐり、従来考えられていた「宮司→桂→名児山→田島→田野→垂水峠」のコースでなく、「内殿→畦町→原町→赤間」のコースで、現在の唐津街道のルートに官道が想定されている（木下，1998）。

2-1-4.鎌倉～江戸前期

鎌倉時代の史料に宗像荘・赤馬荘・東郷・野坂荘などの記述があり、宗像神社の根本神領となったと見られる。宗像荘・赤馬荘・野坂荘は、土穴・山田・須恵、赤間・三郎丸、野坂・朝町などの釣川中流から上流に所在しており、農耕基盤の安定した部分とみられる。

鎌倉時代には、稲元・曲・東郷などの中世郷名が知られ、釣川・横山川・八並川・朝町川・高瀬川などの氾濫原及び湿地に灌漑を施す開発が推察される。注目されるのは、宗像大宮司氏の拠点をもとに、山田・土穴・田久の地名に基づき、「〇〇大宮司」呼称されている。宗像神社の根本神領は、土穴・須恵・稲元とされ、鎌倉時代以降の宗像氏の重要な経済的基盤を支えていた。この事は、宗像大

社文書などの中世史料や経筒の記載が知られる。また、野坂別府・田野別府なども史料で検討されるが、考古学的には不十分な点が多い（宗像神社復興期成会編，1961）。宗像の中世研究は、領主化した大宮司と開発型条里、集落内の宗像神社末社の問題を、史料と共に、総合的に理解をすることが可能な地域である（桑田，2003）。戦国時代末の『田島諸小路屋敷帳』も一例で、田島・福田周辺に屋敷の存在が天正二年（1574）の史料に記事があり、この区域には屋敷・寺院が確認されよう。

2-1-5.江戸中期以降（釣川の改修）

江戸時代中期に東郷村の前身である集落が、釣川の氾濫で壊滅し、現在の位置に移動したことが知られている。水害の多い釣川本流沿いは、長期集落を営むには適切な土地ではなかったようである。しかし、宝暦三年（1754）・寛政三年（1791）には、富永軍次郎などによる釣川河口の江口に屈曲していた出口を直線的に延ばす開削工事と江口～辻田橋までの釣川浚渫が行なわれた。筑前国続風土記によると、深田周辺に洪水のたびに耐水していた水が流れ、流域の水はけがよくなり、湿地に排水路が掘られ、耕地化が進んだことが予想される（貝原，1703）。また、釣川の水運は、舟が土穴（船庭）まで遡上することが知られる。江戸中期の釣川の古絵図をみると、流路はほぼ現在の位置に固定しているようである。ところが、流路周辺には、河東久戸・曲北側などに沼地の溜池などが残っていたようである。明治末期～大正年間には、大字ごとに圃場整理事業が行なわれ、現在の区画畦畔の景観がつくられる。古い地割を踏襲しながら、用排水路の整備がなされた。しかし、釣川沿いには標高5 m以下の地域には長期集落が営まれることがなかった。

2-2.福岡潟と桂潟

2-2-1.福岡潟

海岸は蓑生浦と呼ばれ、和名抄の蓑生郷が、西郷川下流部に推定される。中流に神興廃寺・畦町遺跡があり、津丸郷の推定領域となっている。弥生～古墳時代の集落は、原町の香葉、福岡駅東側、津丸五郎丸遺跡などが知られるが、実態が明らかでない。西郷川の下流域の氾濫原には遺跡は確認されておらず、上西郷や検見坂付近まで氾濫原がひろがっており、弥生時代から古墳時代には潟湖の存在が推定される。上流部に畦町遺跡があり、内殿・畦町周辺は集落や水田が広がっていたものと推察される。

2-2-2.桂潟

『宗像市史』に縄文時代前期の海岸線が復元されている（下山，1997）。弥生時

代～古墳時代においても、入海が広がっていたものと推定されている。同時期の遺跡も、丘陵や海浜部に勝浦・練原・新原奴原・生家・在自遺跡などが知られる。古墳時代の集落・古墳群の様相から潟や入海の様相が想定される。農耕は、谷水田を中心とする農耕基盤と考えられる。奈良～鎌倉時代には、交通路も丘陵部をとおり、名児山越のルートである。ただし、中世には在自西ノ後遺跡が、唐坊（津屋崎中学校）と考えられることから、潟の陸地化が進んだと見られる。

江戸時代には、塩田に広く利用されており、現在も潟が残る。留意されるのは、渡半島が塩浜から勝浦浜に続いて砂州が延びていたことで、海の中道の景観を呈していた。ところが、一部、白石浜で低い部分があり、古墳時代後半期には砂州帯を切通し、玄界灘に繋がっていたものと、私は推定する（花田, 1993）。

このように、宗像地域の景観は現代と異なり、潟が広がっていたものと考えられる。同様な現象は、古賀地域・糸島地域・遠賀川流域でも知られる。人々の営みの中で、入海→潟→湿地→水田への変化を遂げた。宗像海人の基層部分は海と平野の基盤を持つ特性が、地理的要因から考えられる。

3.旧石器時代・縄文時代の遺跡

3-1.旧石器時代

発見されている遺跡は、宗像市池浦トボシ遺跡（ナイフ形石器）、平等寺長浦・原遺跡（剥片）、光岡長尾遺跡（台形石器）、福津市井ノ口遺跡（剥片尖頭石）、牟田池遺跡（ナイフ形石器・剥片尖頭石・楔形石器）手光酒屋遺跡（ナイフ形石器）などである。牟田池遺跡では、石器が多く、今後にもまだ発見される可能性がある。遺跡のあり方から、季節的な狩猟場などと推定されている。時期は、ナイフ形石器～細石器文化とされる。また、田野瀬戸古墳周辺でも石器などが出土した（平田, 1997）。

3-2.縄文時代

縄文時代の遺跡は、最も古いものが江口海岸遺跡（前期）、江口神原遺跡（前期）などが知られている。江口神原遺跡は、昭和56年11月～12月に発見され、中村修身氏より報告されている（中村, 1982）。縄文土器は前期の曾畑式と思われるもの1点と中期後半～後期初頭の粗製深鉢の破片が採集されている。これらに伴って、鯉節形大珠・剥片・スクレパー・石匙・礫器・石鏃・打製石斧が採集されている。遺跡は土砂取りの発見のため詳細は不明であるが砂丘上に立地し、2枚の文化層が確認されている。遺跡は、現在のところ貝塚を伴っていないが、周辺で

発見される可能性もある。江口海岸遺跡は、白木の本号報告がある（白木，2010）。

縄文時代後期の鐘崎上八（こうじょう）貝塚は、後期中葉「鐘崎式」の標式遺跡で著名な貝塚である。大正年間に、坪井正五郎が鑑定を行なった。貝塚の調査は、昭和9年～昭和38年に3回実施されているが、第2・3次は立会調査であつた（田中，1936）。第1次調査（昭和9年11月）は、田中幸夫・鏡山猛によって、貝塚と隣接地（住居？）が調査されている。貝塚は、「標高4間余、砂山の頂から表面の砂を取り除けば、一尺至3尺位の貝層が45坪の面積を充していて、その下はまた砂層になっている」ということであつた。貝類は、アサリ・カキ・バイ・アカガイ・ナガニシ・テングニシ・レイシ・クボガイ・イガイ・ツメタガイ・ヨメガカサ・オホヘビガイ・ホタテガイ・サザエ・アワビ・ウミニナ等の海水産の貝類を主としている。また、淡水産のシジミ・カワニナ等が混じっている。さらに、猪・鹿の角・歯・牙や・魚・鳥骨の類も少なくない。土器は縄文土器80点と石器41点が報告されている。これらは、旧宗像郷土館に展示され、現在宗像高校に保管されて



鐘崎上八貝塚の縄文土器

ている。第2次調査（昭和27年10月）は、名和羊一郎・渡辺正気・原田忠昭による調査で、縄文土器・石器以外に老人女性1体と鹿角製筭2個が出土している（原田・小川，1955）。第3次調査（昭和38年）は、4体の人骨と共に頭部にサメ歯製耳飾1個を着装する人骨が知られる。以上が鐘崎上八貝塚に関する3回の調査の概要である。

これら報告を総合すると、縄文土器163点・石器64点・貝輪等7点となり、234点は確実に出土している。これらに九州大学考古学研究室所蔵分を含めると300点前後になるものと推定される（垂水康，1979・花田，1993）。また、釣川上流の富士原深田遺跡でも土器類が出土する。晩期になると、吉留下惣原遺跡は、釣川上流で確認されたもので、A地区で遺物包含層から、縄文土器・石鏃・石斧・スクレパー等が出土してい

る。土器は、縄文晩期のものとみられているが出土量が少ない。また、福津市の手光緑遺跡でも中期・後期・晩期の遺物が検出される。奴山馬場遺跡では、晩期の埋甕が検出される。

このように、宗像地域は釣川流域が宗像入海となっていた為、縄文時代の遺跡は少ないが、潟周辺や玄界灘沿岸の砂丘下に発見される可能性が高い（清水，1997）。

4. 弥生時代の遺跡

4-1. 弥生集落の様相

宗像における集落は、大きく釣川水系、西郷川水系、玄界灘沿岸に面した海浜部の3地区に大別される。しかし、旧海岸線を推定すると宗像入海、津屋崎入海や後背湿地などによって、水田可耕地は極端に狭く、福岡・早良平野のような大規模な集落は存在しない。近年の発掘調査で、いくつかの遺跡が調査され、実態が明らかとなりつつある。このような発掘調査成果により集落・墓域について検討する（花田，1993）。

4-1-1. 釣川水系

地形と遺跡の分布により、水系を中心とする東郷、赤間、南郷の地勢圏に細別できる。

東郷地勢圏（釣川中央部の遺跡）

東郷と田熊は、釣川の支流である松本川の両側に派生する低丘陵上に立地する。田熊地区では、スベットウ古墳の立地する屋根に続く示現神社（標高18m）が突出し、その北東側に標高14～16mの平坦面が広がる。遺跡は、出土地や散布地から、田熊石畑遺跡、田熊上ノ畑遺跡、田熊中尾遺跡に大別される。東郷地区の遺跡は、高塚古墳の立地する丘陵に続く、小尾根が北東に突出し、旧国道3号線へ伸びる。微高地は、等高線を詳細に観察すると8～12mの等高線が集落上に明確に認められる。丘陵は宗像高校南側から、宗像自治会館に平坦面が広がる。南側の字下ノ畑～古屋敷の畑地は、昭和46～48年当時に弥生土器・須恵器・土師器の広域な散布が認められており、遺構の存在が予想されていたが、東郷古屋敷で竪穴住居が確認される（花田，1993）。

田熊石畑遺跡 旧宗像高等女学校に所在する集落跡で、標高12m前後の微高地上に立地する。地下げ地は、南側がグラウンド、北側は校舎として宗像高等女学校、宗像中央中学校時代（昭和40年頃まで）に利用されていた。グラウンドは、南側1m

ほど削平されているものの、中央部は西側の水田面と同一であり、かなりの遺構が残存する可能性が強い。特に南側崖面には、耕土下に遺物包含層が露出し、弥生土器・須恵器などが現在でも採集できた。郷土館には、土器・太型蛤刃石斧・柱状片刃石斧・石戈・石剣・叩石・石包丁などがあり、弥生前期中葉～古墳時代にかけて遺構が存在するものと考えられていた。

平成20年度の宗像市調査区では、南西隅で9基の木棺墓が確認された。細形銅剣1点、中細形銅剣3点、細形銅戈1点、ヒスイ製垂飾2点、碧玉製管玉19点を検出した1号木棺墓をはじめ、調査された6基すべての木棺墓から青銅製武器が検出された。本来、南北14m以上、東西8m以上の方形の区画墓と推測される。青銅製武器は15点を数え、弥生時代中期前半と考えられる。木棺墓群の北側では、居住域が広がっている。竪穴住居6棟、貯蔵穴及び土坑170基あまりが検出されて、時期は主に中期初頭から前葉の時期に比定される。その北東部では直径約60mの環濠の半分程度を確認した。削平を受けていたため、現状では幅1.6m、深さ0.5mで、入り口2カ所も確認されている。時期は、弥生時代前期後半から末である。検出された15点の青銅製武器は、北部九州の区画墓では最多となる。また、それに併行する時期の集落跡も検出され、区画墓を営んだ集団のあり方を知ることができる。このように田熊石畑遺跡は、北部九州における弥生時代の集落や墓制の在り方を知る上で極めて重要である（白木, 2009）。

田熊中尾遺跡 スベットウ古墳の立地する丘陵より続く小尾根上に位置し、先端は示現神社となる。示現神社周辺では、南側の崖面で袋状竪穴、忠魂碑建設にて、甕棺・銅剣1口が検出されている。また、神社南側に昭和14年当時、乳牛場があり、弥生土器が出土しているようだ。現在も、神社崖面や東郷小学校斜面に土器の散布が認められる。さらに、東郷遺跡群の調査地（中尾遺跡）に続く平坦面にも土器散布が確認される。

以上のことから、示現神社周囲に弥生前期後半の貯蔵穴群と斜面に中期の土壙墓などの墓地が存在するようだ。日の里団地の中尾遺跡調査区では、遺構は検出されていないものの弥生前・中期前半の土器群が多量に出土しており、JR線北側にも同時期の遺構群が広がることは確実であろう（波多野, 1967）。

田熊上ノ畑遺跡 スベットウ古墳から東北に伸びる平坦面上に立地する遺跡で、従来、弥生土器・須恵器・土師器・青磁などの広域な散布が知られていたようだ。調査は、日の里団地の造成に伴って、昭和41年に遺物の集中する上ノ畑遺跡の北地区（200㎡）と南地区（300㎡）について実施されている。北地区は、北側へ傾斜する斜面に竪穴住居1棟、袋状竪穴4ヶ所・柱穴群、遺跡が検出されている。詳細な出土状況は、報告書からは復元不可能である。このうち、竪穴住居

は、山辺3.8×4.5mの隅丸方形住居で、支柱穴が4本認められる。壁溝も全周している。住居からは、土師器の甑・椀・甕が出土しており、古墳時代中期以降と考えられる。貯蔵穴と考えられる土壇はA・B・C・F穴で埋土内より弥生時代中期の土器群が出土しているようである。柱穴は、配列が明確ではないが、1～2棟の掘立柱建物が存在したのかも知れない。土器は、D地点周辺に集中して出土していたようであり、弥生中期後半のものが大半であるが、古墳時代の土師器も含まれる。

上ノ畑遺跡南地区は、約2500㎡前後の畑地に9ヶ所のトレンチが設定され、遺物の有無の確認が行われている。遺物は、弥生中～後期の土師器片が出土した（波多野, 1967）。

このように2ヶ所の調査区で、弥生中～後期、古墳時代、中世の遺構が一部検出されたに留まっている。遺跡の状況から、水田に伴う削平が著しく、大半の部分が未調査で消滅したことは惜しまれる。

以上が田熊遺跡の5ヶ所より検出された遺構及び遺物の概要である。これらを現在、確認できる出土遺物を整理し、時期別にみると次のようになる。①は、弥生前期の遺物が出土する地点は、石畑地区（宗像高等女学校）・役場裏地区（恵比須町）・中尾地区（示現神社）・上ノ畑地区の地区で確認できる。特に石畑・役場裏地区に土器・石器出土が集中するようである。②は、4ヶ所とも前期～中期に断続するようである。③は、弥生時代以降の遺物が検出されるのは、上ノ畑・石畑・恵比須町地区で、古墳時代中～後期の遺物も出土する。

東郷登り立遺跡 東郷丘陵背後の標高30mの丘陵上に立地する。遺構は、方形の竪穴住居1棟と石蓋土壇が検出され、弥生後期後半に比定される。宗像高校内の発掘調査では、前期初頭の長径100mの環濠が検出される。弥生時代早期としては、環濠の規模も大きい。削平されているが、後期前半～末の遺構も確認される（宗像市教育委員会, 2001）。

大井（和歌神社）遺跡 標高20m前後の低丘陵に位置し、石剣・太型蛤刃石斧が出土しており、弥生前～中期と考えられる。

釣川遺跡 釣川中央部の氾濫原である向手丘陵南端に立地している。採集遺物は、太型蛤刃石斧・広形銅矛1口・鑄造鉄斧がある。これら以外に古墳時代前・中期の遺物が多く出土する。遺構は時期不明の竪穴が確認されている程度で明らかでない。ただし、石斧や銅矛の出土から、弥生中期～後期の遺構の存在が推察される（田中, 1935）。

大井三倉遺跡 標高20mの丘陵上に立地する集落で、V字溝・竪穴住居2棟・袋状竪穴3基が検出される。ⅡB区のV字溝は、幅5m、深さ1.9mで、約90mにわ

たって続き、幅6mの陸橋部が検出されている。環壕内部では、袋状土壇などは存在しないようだ。時期は弥生前期中葉に比定される。竪穴住居は、環壕から北へ170mに位置し、円形住居2基と同時期の貯蔵穴が検出されている。時期は、中期前半と考えられている（宗像市教育委員会, 1987）。

久原遺跡 標高30～40mの丘陵上で、袋状竪穴18基・甕棺5基・土壇墓41基が検出されている。袋状竪穴は、Ⅱ区に18基が群集し、弥生前期末～中期前半に比定される。土壇墓は、8基が甕棺5基と共に同じ平坦面にあるが、中期の33基は、この一群と離れた位置にある。前期のⅡ-8号墓からは、有柄式石剣と有茎磨製石鏃4点が出土している。中期のⅣ-1号墓からは、細形銅剣1本・細形銅矛1本・管玉12点が出土し、中期中葉に比定される。甕棺は5基あり小児棺と考えられている（宗像市教育委員会, 1988）。

曲香烟遺跡 標高35mの丘陵上に立地し、袋状竪穴74基が検出されている。遺構は、A・Bの小尾根頂部にあり、前期後半～末の年代と考えられている。竪穴住居は、周辺で検出されていないが、かつては谷部に土器・黒燐石の散布があった（宗像市教育委員会, 1984）。

稲元久保遺跡 Ⅲ区の標高35mの丘陵上で弥生中期の袋状竪穴が検出されている。

須恵クヒノ浦遺跡 標高30m前後の丘陵で袋状竪穴20基前後が検出されている。時期は前期～中期前半と考えられる。

赤間地勢圏（釣川上流部の遺跡）

田久松ヶ浦遺跡 田久の小平野を見下ろす丘陵上に立地し、前期前半の墳墓（木棺墓・石槨墓・土壇墓・甕棺）中期～後期の竪穴住居11棟・貯蔵穴が検出される。円形と方形の竪穴住居が検出された（宗像市教育委員会, 1999）。

富地原梅木遺跡 標高30～40mの丘陵上に立地し、竪穴住居14棟・袋状竪穴86基・土壇墓と石蓋土壇111基からなる集落と墓域である。遺跡は、弥生前期末～中期初頭の竪穴住居と袋状土壇の集落が廃絶した後に、中期の土壇墓群が111基の営墓がなされ、後期末の集落が形成されている（宗像市教育委員会, 1990）。

富地原森遺跡 平坦面に竪穴住居・土壇が検出されている。時期は、中期初頭～後期となる。

富地原岩野B遺跡 低丘陵に位置する遺跡で、円形住居4棟、方形住居4棟、掘立柱建物群が検出されている。円形住居は、中期前葉～中期中頃、方形住居が後期後半に比定される。

富地原小嶺遺跡 尾根斜面に前期～中期にかけての貯蔵穴58基、直径6mの円形の竪穴住居5棟が検出される。また、土壇墓が10基ほど調査される。

石丸遺跡 丘陵上に11基の袋状竪穴・溝状遺構が検出され、中期初頭の時期に比定される。このうち、3号袋状竪穴から、土器・獣骨・貝類が出土している。

武丸初瀬遺跡 丘陵先端に前期末～中期の貯蔵穴29と住居3棟が検出される。

武丸的場遺跡 直径5.7mを測る前期の円形住居が1棟検出される。

吉留京田遺跡 平野部に立地し、円形の竪穴住居と甕棺墓3基が調査されている。甕棺は2つの甕を合せた小児用のもので、弥生後期と考えられている。このうちの1つからは、ガラス小玉と管玉が出土している。

徳重高田遺跡 名残丘陵に立地する墓地で、土壙墓44基、箱式石棺27基、石蓋土壙墓15基など各種の葬法を用いた墳墓群である。時期は弥生後期に造墓が開始され、古墳時代まで続くようである。第4次調査では、丘陵頂部に10基、北尾根上の中腹に14基、北東側裾に10基、東南裾部に2基の4単位の造墓集団が指摘されている。出土遺物は、鉄鏃・素環頭刀子・後漢鏡片などがある。これら以外に三郎丸今井城遺跡の土壙墓、徳重遺跡・安倉などに弥生遺跡が知られる（宗像市教育委員会, 1991）。

田久立崎遺跡 釣川を見下ろす低丘陵に位置し、前期後半の幅3mのV字形の環壕が検出された。

南郷地勢圏（釣川南部の遺跡）

野坂一町間遺跡 平野部に立地する集落であるが、削平が著しく掘立柱建物1棟・竪穴8ヶ所を検出したに留まっている。建物は一間（4.3m）×1間（3.3m）を測るもので倉庫と考えられる。竪穴からは中期後半の土器・石器類が出土している。

野坂松ヶ崎遺跡 前期の竪穴住居1棟と貯蔵穴2基が確認される。

光岡長尾遺跡 標高30mの丘陵上に直径42～46mの円形を呈すV字溝とその内外に50基以上の袋状竪穴が検出されている。V字溝は幅4m、深さ3mを有し、南北に1.5m幅の陸橋を削り残している。周囲には、竪穴住居等は検出されておらず、貯蔵穴群単体の環壕である点は注目される。遺物は、土器・石器類に伴って陶損が出土している。時期は、弥生前期末～中期初頭と考えられる（安部, 1997）。

朝町竹重遺跡 標高40mの丘陵上に土壙墓105基前後が検出されている。そのうち、土壙墓から細形銅戈1口・銅矛1口が出土している。この墓の年代は、中期前葉と推定される。土壙墓群は全体として、弥生前期末～中期後半の営墓と考えられる（安部, 1997）。

光岡草場遺跡 小丘陵上に立地する大小の土壙墓24基と甕棺2基が検出されている。このうち、2基の土壙墓に壺の供献があり、弥生中期後半と考えられる。また、2基の甕棺は、甕を合せ、墓壙内に水平に納めたもので小児棺と考えられる。

光岡辻ノ園遺跡 光岡の低丘陵に位置する遺跡で、中期末～後期初頭の竪穴住居2棟・土壇16・溝が検出されている。

朝田町ノ坪遺跡 標高15～20mの低丘陵裾で、弥生中期中葉の円形住居が検出されている。これら以外に大穂谷塚（太型蛤刃石斧）の出土地点がある。

これら以外に河東神社（中期）・久戸遺跡（中期～後期）・多礼コキゾノ（石剣）・多礼楠木（石斧）・田島瀧ノ口（石斧）などの採集地がある。

4-1-2.西郷川水系（西郷川流域の遺跡）

古くは、香葉遺跡・福間川・元朔田（石器）・津丸（石剣）・大和（小児甕棺）などの出土地が知られていたが、近年に手光酒屋・福間割畑遺跡・手光久保田遺跡・福間中ノ坪遺跡などが調査される。

手光於緑遺跡 手光の小平野内から溝群が検出された。前期の土器が出土した。さらに、中期～後期初頭の溝状遺構や水貯遺構が検出される。

手光酒屋遺跡 竪穴住居1棟で中期末～後期初頭に比定される。

福間割畑遺跡 貯蔵穴が2基検出された。土器の他に、石包丁・砥石が出土する。

福間福正寺遺跡 福間の低丘陵に位置し、後期の竪穴住居3棟が検出された。

香葉遺跡 八龍神社西側の丘陵上に立地する遺跡で、竪穴住居等が存在したようだ。遺物からは、太型蛤刃石斧と弥生中期の土器群が出土している。

今川遺跡 標高14mの砂丘上に立地し、竪穴住居1棟・環壕が検出されている。環壕は幅3m、深さ1.3mで弧状となる。そのうちには、円形の竪穴住居が検出され、やや先行して造られている。環壕の時期は、板付Ⅰ式期とされ、前期初頭に比定される。遺物は、打製及び磨製石鏃・石斧・砥石が多く出土し、石錘も多数認められる。また、銅鏃として2次加工された遼寧式銅剣が板付Ⅰ式の文化層に出土する（酒井, 1981）。

宮地大ヒタイ遺跡 福間海岸の砂丘上に位置する遺跡で、前期後半～中期の貯蔵穴20基が検出される（津屋崎町教育委員会, 1993）。

4-1-3.玄界灘沿岸（海浜の遺跡）

津屋崎の海浜や神湊・鐘崎の海浜の遺跡で、古くは宮司（土器・黒耀石）・須多田宮ノ下（器台）が知られていた。圃場整備に伴い、多くの遺跡が調査される。

勝浦坂口遺跡 弥生後期の円形の竪穴住居2棟が検出される。

勝浦高堀遺跡 勝浦の丘陵上に位置する遺跡で、貯蔵穴1が確認された。注目されるのは、銅鐸鋳型未製品が出土している。中期中ごろとされる（津屋崎町教育委員会, 1998）。

奴山伏原遺跡 奴山川南岸に立地し、弥生土器・太型蛤刃石斧・石鏃（黒耀

石)が出土している。遺物は、新原・奴山30号墳～36号墳北側で採集されたものが多い。発掘調査で中期の円形住居1棟が確認された。

生家釘ヶ浦遺跡 桂潟の中央部新原の南側、海岸をやや奥まった丘陵緩斜面にて、集落が確認されている。弥生時代後期～古墳時代早期の遺物も出土しており、前身集落の存在が窺える。集落は、弥生時代後期末から庄内式併行期の流路、堅穴住居3棟が確認される。

須多田立石遺跡 須多田の丘陵上で、中期の円形住居1棟が検出された。

田野依嶽神社 田野の丘陵上に立地し、太型蛤刃石斧が採集されている。

鐘崎上八遺跡 標高5mの砂丘上に立地し、甕棺2・箱式石棺4基などが調査されている。甕棺は口縁部を上に向け、約30度の傾斜で埋葬された単棺である。甕棺は器高70cm、体部径41cm、底径14cmで口径40cm前後と推定される。時期は前期後半と考えられる。周囲には板付Ⅱ式の壺。須玖式の高杯が出土しており、弥生前期後半～中期にかけての墓地である。箱式石棺については、出土遺物はなく、時期は不明である(鏡山, 1972)。

これら、釣川・西郷川流域・玄界灘海浜部の遺跡を通じて云えることは、水田可耕地が狭く、弥生前・中期の遺跡は、水田を見下ろす丘陵上に立地する場合が多い。一方、後期になると、小支谷や小平野の低地または丘陵に集落が立地するようになる。

4-2. 弥生集落と袋状堅穴

堅穴住居が検出されている遺跡は、田熊石畑・今川・大井三倉・冨地原梅木・野坂一町間・朝町町ノ坪・吉留京田・須恵クヒノ浦遺跡などが代表的なものである。

このうち、今川遺跡が前期初頭、大井三倉遺跡(中期初頭)、野坂一町間遺跡(中期後半)、朝町町ノ坪遺跡(中期後半)、冨地原梅木遺跡(前期末～中期初頭と後期)、須恵クヒノ浦(前期終末)・田久松ヶ浦(後期後半)が年代に比定される。住居の基本形態は、前～中期を通じて円形を呈し、後期後半～終末に長方形または方形への移行がみられる。

冨地原梅木遺跡では、中期初頭～前葉の円形住居が尾根斜面に11棟が検出される。梅木Ⅲ期は尾根北側に4棟、南側に2棟の2グループから構成される。梅木Ⅳ期は20～40mの間隔で5棟が検出されている。同時期の袋状堅穴とも対応関係も認められる。また、石丸遺跡3号貯蔵穴からは、廃棄された城ノ越式期に粳・猪・たぬき・鹿などの獣骨や貝類が出土している。貝類は、釣川下流域の淡水産のしじみ、かわにな、鐘崎・神湊の岩礁性のあわび・さざえが出土している(橋口,

1980)。

一方、環壕を有する大井三倉遺跡では、貯蔵穴等の深い遺構の存在は比定されており、崖面に、前期中葉の土器群が竪穴住居状の遺構内が認められたことから、住居群に伴うものとみられる。また、田熊石畑遺跡・東郷登り立遺跡でも環壕が確認される。いずれにせよ、竪穴住居の集落群の実態は、今後の調査に待つしかない。

袋状竪穴（貯蔵穴）は、田熊石畑遺跡（170基）、大井三倉遺跡（3基）・冨地原梅木遺跡（86基）、久原遺跡（18基）・光岡長尾遺跡（50基）・曲香畑遺跡（58基）・須恵クヒノ浦遺跡（20基前後）・石丸遺跡（11基）・稲元久保遺跡・田熊中尾遺跡（2基）・田熊上ノ畑遺跡（4基）、大井平野（5基）などがあり、多数が調査されている。時期はほとんどのものが、前期後半～中期前半に比定される。これらは、水田から10～20m以内の比高差を有する丘陵上に立地する。

このうち、冨地原梅木・曲香畑遺跡などの丘陵上に群集する一群と光岡長尾遺跡のような環壕を有する大規模なものである。袋状竪穴が貯蔵穴として、穀物を主たる倉庫としての環壕内に袋状竪穴を有するものがある。前者は通有に存在し、数群のグループからなり、後者は光岡長尾遺跡の母集落が大規模なものと予想される。袋状土壇が中期後半に検出されないことから、平野部集落の掘立柱倉庫への穀物管理が変化したようだ。ただし、平野部の集落調査が進んでおらず実態は不明確な点が多い。

4-3.弥生墓制の様相

4-3-1.墓地

発掘調査によって、田熊石畑・冨地原梅木・久原・朝町竹重・光岡草場・徳重高田遺跡などで、土壇墓・甕棺・石蓋土壇・箱式石棺などが検出されている。このうち、土壇墓が宗像の弥生時代の全般期に主流の墓制である。次に、発掘調査に伴う代表的なものを通じ、墓制のあり方を検討したい。

田熊石畑遺跡では、9基の木棺墓を確認された。木棺の同一方向のもの、直交するものなどがあり、計画的に配置されている。このうち、1号墓からは、5本（銅剣1・銅矛2・銅戈1）、ヒスイ製垂飾・管玉19が出土した。2号墓では、4本（銅剣1・銅矛2・銅戈1）と管玉9を確認された。3号墓は、銅剣1本、4号墓で3本（銅剣1・銅矛2・銅戈1）と勾玉1・管玉133が出土した。6号墓は、銅剣1本・ガラス小玉1・勾玉1が確認。7号墓では、銅剣1本・異形勾玉1・管玉48が出土した。このように、まとまった区域の墓に出土しており、有力集団層の墓域であることが注目される。遺跡は、さらに南側に広がっており、青銅器の数は増加する

と思われる（白木, 2009）。

田久松ヶ浦遺跡では、丘陵上に石槨墓1基・木棺墓9基・土壙墓3基・甕棺墓1基が検出された。石槨墓はこの遺跡を特徴づけるものである。木棺墓は、副葬小壺の収納空間を作る。出土品に有柄式石剣・有茎磨製石鏃が出土している。前期の墓地としては最も古相である（宗像市教育委員会, 1999）。

久原遺跡では、前期の土壙墓が8基と甕棺5基が検出されている。土壙墓は、長さ2m前後、幅0.6m前後の素掘りで、成人墓と見做されている。このうち、Ⅱ-8号墓からは、有柄式石剣1点・有茎磨製石鏃4点が出土している。甕棺は土壙墓に群在し、土壙内より下甕が出土しており、本来合口の小児棺と推定される。したがって、久原遺跡の前期の墓地は、土壙墓が成人、甕棺が小児と考えられている。中期になると、墓地は尾根南側に移動し、土壙墓33基が密集する。土壙墓は、2段の墓壙内の中央に被葬者を埋葬する構造のものが多く、規模より成人・小児を共に埋葬したものと見做されている。土壙墓の配置は、南北に主軸を有するもの10基、東西方向の軸のものが23基あり、2群の配列が確認できる。また、祭祀遺構が調査区南側で検出されている。これらのうち、Ⅳ-1号墓は、墓壙長2.9m×幅1.9mで棺身長2.3m×幅1.2mを測り、内部より、細形銅剣1口・細形銅矛1口が出土している。群内の有力首長墓と考えられ、弥生中期中葉に比定される（宗像市教育委員会, 1990）。

光岡草場遺跡は、丘陵上に24基の土壙墓と甕棺墓2基が検出されている。その配置は南北主軸のもの8基、東西主軸の14基の2群配列が確認できる。土壙墓の構造は、2段掘りのものと、素掘りが半分であるが、大型のものは2段掘りとなっている。副葬品は、ほとんどなく、墓壙に土器供献されたものが24号・2号・11号墓が知られる。久原遺跡と同様に、土壙墓は大小があり、成人・小児が埋葬されたものと見做される。甕棺墓は、2基とも、甕形土器を合口としたものであり、小児棺で中期後半に比定される。このように、遺跡としては、中期前葉～後葉に営墓されたものであり、中葉をピークとするようである。

富地原梅木遺跡は、丘陵主軸に沿った105基の土壙墓が検出されている。その配置は尾根主軸方向に88基があり、強い規制の中で営墓が行われたようである。このうち、主軸を大きく変える13基が知られる。構造は、2段掘りのものが6割、残りが素掘りとなっているが、削平などを考慮すると、7割前後が2段掘りとみられる。規模においても長さ2m×幅0.6m前後の棺身のものが一般的で成人墓と考えられ、小型の一群は小児墓と考えられる。この中でSK-1は、墓長3.2m×幅2.2mと最大規模であり、鉄戈が副葬されることから、有力首長墓と見做される。さらに、SK-53で鉄戈、SK-75で刀子、SK-18で管玉の副葬があり留意される。一

方、12基に供献土器が認められ、これらが2段掘りの構造に多く検出されることに注目される。造墓時期は、供献土器によって弥生中期内に造墓がなされ、北から南への造墓が指摘されているまた、墓域北端に祭祀土壇（SK-200）が設けられている。

朝町竹重遺跡は、丘陵上に土壇墓・木棺墓・甕棺墓が約105基検出されている。墳墓群は、4グループに分けられ、それぞれが低墳丘を有する。墳丘は、10～15mの方形区画を有し、15～50基の土壇墓・木棺墓・甕棺墓が検出されている。時期は弥生前期末～中期後半に比定される。

徳重高田遺跡は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての箱式石棺42基・石蓋土壇墓25基・土壇墓57基が調査されている。箱式石棺・石蓋土壇墓ともに土器副葬が少ないため、年代が決定しがたいが、後期には、これらの埋葬が多く用いられているようである。

吉留京田遺跡は、平野部で3基の甕棺が検出されている。2・3号は近接し、1号はやや北へ離れた地点に位置する。このうち、1号棺は短辺0.65m×長辺1.35mの楕円形の墓壇に甕を組合せたものである。下甕内よりガラス製小玉と碧玉製管玉が出土し、弥生後期に比定される小児棺である。これらの遺跡以外に三郎丸遺跡が、2段掘りの土壇から弥生中期に推定されている。

鐘崎上八遺跡は、玄界灘に面した砂丘上で、甕棺と箱式石棺が調査されている。甕棺は、300㎡前後の傾斜地に埋置された単棺で器高70cmを測る。小児用と推定され、前期後半に比定される。箱式石棺は、出土遺物がなく時期は不明である。出土資料は東京国立博物館に保管される。

以上の遺跡が墓地として調査された主要なものである。宗像における弥生時代の通有の葬法は、土壇墓を主体とした成人墓が前～中期を通じて認められ、後期に箱式石棺・石蓋土壇墓が加わるようである。甕棺は、久原・光岡草場・富地原梅木・鐘崎上八・吉留京田遺跡にみられるように、前～中期に小児棺として土壇墓群に付属して群在し、後期には単体で分布する様相である。したがって、基本的には北部九州の成人甕棺埋葬のエリアとは異なる。一方、土壇墓には小児用と思われるものもが、成人墓内に付属して混在する。そして、有力首長墓は、土壇墓内に青銅器・鉄器を威信財として副葬する。さらに、富地原梅木・朝町竹重遺跡のように、一定方向の造墓規制を窺えるような縦列配置が中期に盛行しており、甕棺文化圏の様相と葬法は異なるものの基本的思想で類似する（花田, 1994）。

4-3-2.青銅器の副葬

釣川遺跡の広形銅矛を除くと他は墳墓からの出土とみられる。遺構としては、木棺墓（田熊石畑）土壇墓（久原IV-1号墓・朝町竹重SK-28号墓）・箱式石棺

(上八中羅尾)・箱式石棺(鐘崎上八)・田熊中尾(土器と共に出土)がある。地域圏でみると、釣川水系の東郷に5遺跡20本、南郷に1遺跡2本がある。玄界灘沿岸の鐘崎に2遺跡4本がある。

時期別にみると、東郷高塚が弥生前期末、田熊石畑遺跡墓が中期前半、朝町竹重が中期初頭、久原IV-1号墓が中期中葉、上八中羅尾が中期後半～後期初頭、釣川が後期後半に比定される。一方、他のものは盗難のため不明であるが、中期を中心とする時期と推定される。現在、宗像郡内出土の武器形青銅器数は25本で、田熊石畑遺跡が15本と突出する。

このように、武器形青銅器は、中期の地勢圏内の有力首長層墳墓へ埋葬されている。特に拠点集落の東郷・田熊遺跡周辺に多く集中することは、釣川流域の東郷地勢圏が、この地域の中核となるものと見做される。さらに、田熊石畑遺跡では、中期前半に特定有家族墓の個人墓が出現しており、各集落を統括する地勢圏首長層と見られる。一方、古墳時代前期に前方後円墳である東郷高塚古墳も、この地域に造墓がなされていることから田熊・東郷地勢圏の優位性が確認できる(花田, 1994)。

5.古墳時代

5-1.古墳時代の集落

集落は、弥生時代の地勢圏を踏襲し、平野部が立地しているものが多い。調査は、釣川上・中流域の宗像市と玄界灘沿岸の津屋崎町に集中しているため、周辺部の実態は必ずしも明らかではない。したがって、農耕に伴う集落の調査が多いが、玄界灘沿岸の海浜集落は在自遺跡群・生家釘ヶ浦遺跡・練原遺跡群などの調査が主なものである。

5-1-1.釣川水系(内陸部の遺跡)

赤間地勢圏では、吉留京田・武丸大上げ・吉留下惣原・武丸小伏・武丸高田・冨地原川原田・冨地原神崎屋遺跡・石丸坂へう遺跡などがあげられる。

吉留京田遺跡 I～III区で5,000㎡から50棟の竪穴住居が検出され、その範囲は、南北250m×東西100mの広域にわたる。竪穴住居は、方形をなすものが主流で、壁溝を廻すものが通有である。時期は、前期～後期までと考えられている(宗像市教育委員会, 1986)。

武丸大上げ遺跡 方形の2棟の住居が検出され、古墳時代前期のものと考えられる。

吉留下惣原遺跡 A区で掘立柱建物2棟・竪穴住居5棟、B区では、掘立柱建物19

棟・竪穴住居14棟・溝5条が検出される。両地区とも掘立柱建物のみで構成されており、規模や構造から倉庫群と推定されている。時期は6世紀後半～7世紀初頭を最盛期とし、7世紀前半に途絶えるようである。

武丸小伏遺跡 I区で竪穴住居2棟、I区で竪穴住居1棟が検出されている。特に2号住居は、4本の支柱穴を持ち、カマドを付設する方形プランを呈し、6世紀後半に比定される。他の2棟も同時期のものである。

武丸初瀬遺跡 丘陵先端に前期の竪穴住居2棟が検出される。

富地原森遺跡 平坦面に竪穴住居2棟・土壇が検出されている。

武丸高田遺跡 竪穴住居4棟・掘立柱建物1棟が検出されている。住居は方形プランを呈し、支柱穴4本で壁溝を廻すものが通有である。3・4号住居には、鍛冶炉が設けられており、工房と考えられる。集落の時期は、5世紀前半～6世紀後半とされる。また、竪穴からは、庄内～布留式（最古）併行用の土器群が出土しており注目される（宗像市教育委員会, 1986）。

富地原川原田遺跡 竪穴住居43棟が検出され、5世紀前半～6世紀を中心とする集落である。このうち、27号住居から軟質の韓式系土器が出土し、渡来人との関係が注目される。特に、24号住居から、畿内の庄内式の特徴を持つ、在地胎土の土器群が検出される（宗像市教育委員会, 1994）。

富地原神崎屋遺跡 滑石製未製品と白玉・有孔円盤・砂石が出土している。これらは、SK8の廃棄土壇や竪穴住居から出土しており、小規模な生産が行われている。滑石石材は、白玉・有孔円盤の原材料と考えられる扁平な石材などが、約3Kgが出土している。（宗像市教育委員会, 1996）

徳重本村遺跡 小丘陵上に5世紀～6世紀の竪穴住居10棟がC区で検出される。

石丸坂へう遺跡 赤間の低丘陵で中期の竪穴住居2棟が確認される。

三郎丸今井城遺跡 弥生時代後期～古墳前期の竪穴住居2棟が検出される。

南郷地勢圏では、野坂一町間・王丸河原・朝町町ノ坪・曲田代遺跡などがあげられる。

野坂一町間遺跡 竪穴住居9棟・掘立柱建物1棟が検出されている。住居の改築や増築が認められるが、5世紀前期～5世紀末に集落が連続する。このうち、4号・5号・6号住居で鉄滓が2500g出土している。特に1号住居で鍛冶炉2基が検出されている。

王丸河原遺跡 竪穴住居10棟が検出されている。住居は、5号住居が前期初頭、他のものが6世紀後半に比定されている。これらの遺跡以外に朝町町ノ坪遺跡では、カマドを造り付ける方形住居が検出され、6世紀後半と考えられている。

光岡六助遺跡 古墳前期～中期の竪穴住居16棟が検出される。住居の重複から

大規模集落と推定される。

光岡番田遺跡 光岡の低丘陵に位置する遺跡で、中期の方形住居2棟が確認される。竈を西辺に設置する。鉄滓が出土する。

光岡辻ノ園遺跡 光岡の低丘陵に位置する遺跡で、古墳時代前期の竪穴住居5棟・土壇・溝が検出されている。タタキ目を有する甕が出土する。

東郷地勢圏では、大井三倉・池浦高田・久原龍ヶ下遺跡などがある。

田熊石畑遺跡 田熊の低丘陵に東西30m×南北50mの範囲に、16棟の掘立柱建物群が検出された。平面が2間×2間のものがほとんどで、総柱構造である。床面積は、10～20㎡が多い。建て直しも確認されるが、建物軸が揃っており同時期のものであろう。時期は、中期初頭と後期後半（6世紀後半）で、後者が中心時期であり、宗形氏中枢の倉庫群と推察される。これら以外に、田熊遺跡群でも前期～後期にかけての遺物が出土しており、今後の調査が期待される（白木, 2009）。

大井平野遺跡 大井の湿地を見下ろす丘陵上に位置する集落で、弥生後期終末～古墳時代前期の竪穴住居が検出される。

大井三倉遺跡 宗像入海を見下ろす丘陵で11棟の竪穴住居が検出されている。削平が著しいが、2号・6号・9号住居が5世紀後半、3号住居が6世紀中葉に比定されている。

池浦高田遺跡 竪穴住居15棟・竪穴7基・溝3条が検出されている。住居は、主柱穴4本・壁溝を有する通有のものばかりである。時期は、6世紀を中心に営まれている。

久原龍ヶ下遺跡 圃場整備では、竪穴住居11棟・溝4条が検出されている。住居は、2本主柱穴の長方形プランのものと、4本主柱穴の方形プランの2種があり、3世紀末～5世紀の集落と考えられている。特に3号住居から板状鉄斧（長さ32cm×幅6cm）に伴って庄内式土器の装飾壺・甕類が出土している。また、韃羽口（1号住居）・鉄鎌（5号住居）・鉈（7号住居）などが出土しており、鍛冶集団との関連が指摘される。丘陵部では、5世紀～6世紀の竪穴住居105棟が検出され、陶質土器・古式須恵器なども含む。5世紀～6世紀中ごろまでの、この地域の最大拠点集落である。鍛冶工房は、5世紀中～後葉の野坂一町間遺跡、6世紀後半の武丸高田遺跡などが調査されており、原野や治水開発に伴う工房と見做される（宗像市教育委員会, 2000）。

5-1-2. 海浜部の遺跡

勝浦遺跡群 桂潟の北東部にあたり、海岸沿いの集落（勝浦坂口・井ノ口遺跡）と丘陵上の集落（勝浦穴田・勝浦堂ノ裏遺跡）に大きく立地している。概ね、弥生時代後期～古墳時代前期を中心とする集落が丘陵上、古墳時代中期～後

期を主体とする集落が海岸沿いにあり、大きく移動する傾向が認められる（津屋崎町教育委員会, 2000）。

勝浦坂口遺跡は、 竪穴住居15棟が検出される。時期は弥生後期～布留2式併行期と考えられている。弥生後期の竪穴住居は円形を呈し、庄内併行期以降は方形プランをなす。方形プランのものは、ベット状遺構や貯蔵穴を持つものが認められる。2～3棟を単位とした小群が連続して営まれたとみる。

勝浦井ノ口遺跡は、竪穴住居13棟が検出される。時期は布留2式併行期～須恵器出現期まで、数棟が重複するが外は間隔をおいて建てられる。大きく等高線に沿って2～3群の単位群から構成される。このうち2棟から、椀形の鍛冶滓が出土する。

勝浦穴田（A区）では、竪穴住居2棟・掘立柱建物1棟・谷が検出される。竪穴住居は、6世紀後半であるが、谷からは5世紀中～6世紀後半の土器類が出土しており、先行する集落が周辺に存在とみられる。

勝浦堂ノ裏遺跡（A区）では、竪穴住居62棟・掘立柱建物2棟・古墳1基が検出される。建物群は、5世紀中～5世紀末のⅠ期、6世紀初め～6世紀末のⅡ期に区分される。Ⅰ期は、南側に竪穴住居10棟が分布する。Ⅱ期は、重複して竪穴住居10棟が配置され、東側に掘立柱建物3棟がみられる。時期不明の竪穴住居も切り合い関係から、Ⅰ期～Ⅱ期に連続して、ほぼ同位置に建て直されたものとみる。6世紀中ごろの古墳は、竪穴住居から20mに隣接して立地している。（B区）には、8世紀の掘立柱建物2棟が確認され、周辺に連続して集落が営まれる。

勝浦堂ノ裏遺跡（C区）では、竪穴住居8棟・古墳1基が検出される。6世紀中～7世紀中頃の竪穴住居と同時期の古墳が、確認される。

勝浦高堀遺跡では、竪穴住居4棟が検出される。このうち2棟は、勝浦井ノ浦古墳の墳丘下にあり、5世紀末以前のもので、造り付け竈が確認される。

練原遺跡群 遺跡群は、桂潟の中央部にあり海岸沿いに広がる小平野に、集落が確認されている。古墳時代中期～後期にかけてのものが多く（津屋崎町教育委員会, 1999）。

練原（練原地区）では、竪穴住居24棟・掘立柱建物22棟が検出される。建物群は、5世紀中～5世紀末のⅠ期、6世紀初め～6世紀末のⅡ期に区分される。Ⅰ期は、南側に竪穴住居8棟、掘立柱建物2棟が分布する。5世紀中頃の竪穴住居に造り付け竈を配置するものがある。Ⅱ期は、南側に継続して竪穴住居が配置され、東側に総柱建物6棟と掘立柱建物3棟がみられる。大型掘立柱建物を中核とした小型倉庫が配列され、竪穴住居の減少があげられる。5世紀後半～6世紀中頃までの時期と考えられる。

練原（ヒエダ地区）では、竪穴住居10棟・掘立柱建物が検出される。竪穴住居は、2群に分けられ、5世紀末～6世紀前半を中心に形成される。

練原（大具地区）では、竪穴住居4棟・掘立柱建物2棟が検出される。掘立柱建物は、堀方が0.6～0.8mで、SB-1は2間（5.6m）×7間（18.8m）、SB-2は2間（5.05m）×7間（18.9m）となり、極めて大きい。SB-2は、南側が総柱構造となる。6世紀中頃と考えられている。

練原（中村地区）では、竪穴住居5棟・掘立柱建物1棟が検出される。時期は6世紀代のもので、竪穴住居に伴って、2間×4間の掘立柱建物が配置される。

練原（長浦地区）では、竪穴住居14棟・掘立柱建物2棟が検出される。5世紀後半～6世紀後半までの時期と考えられる。竪穴住居には、総柱構造の掘立柱建物が伴う。

奴山遺跡群 遺跡群は、桂潟の中央部にあり海岸をやや奥まった丘陵上にて、集落が確認されている。弥生時代の遺物も出土しており、前身集落の存在が窺えるが、小規模と見られる。奴山伏原遺跡は、古墳群の北側に立地しており、同時期のものが知られる。

奴山番田遺跡は、奴山平野の奥部で、6世紀後半の竪穴住居8棟・掘立柱建物3棟が調査される。

奴山大門遺跡は、6世紀前半～末にかけての竪穴住居10棟が緩斜面に営まれる。造り付け竈に支脚とするものがある。溝から7世紀後半の遺物が出土する。

奴山伏原遺跡は、古墳群の北側に広がり、発掘調査によって竪穴住居70棟・区画溝等が検出されている。時期は5世紀～6世紀後半までで、6世紀代が中心時期となる。遺物は、石錘・紡垂車・移動式竈・朝鮮系軟質土器・ミニチュア土器・陶質土器などが出土する。なお、6世紀に火災住居が多いことが指摘される。

生家釘ヶ浦遺跡 遺跡は、桂潟の中央部新原の南側、海岸をやや奥まった丘陵緩斜面にて、集落が確認されている。弥生時代後期～古墳時代早期の遺物も出土しており、前身集落の存在が窺える。集落は、弥生時代後期末から庄内式併行期の流路、竪穴住居3棟が確認される。古墳時代の建物群は、5世紀後半～6世紀末にかけて連続して営まれる。竪穴の単位群は、3～4群があり、数棟が建替えを行い、小群をなす。移動式竈や百済系の韓式系土器が出土する。

在自遺跡群 桂潟の南東部にあたり海岸から離れた、奥まった丘陵緩斜面にて、集落が確認されている（津屋崎町教育委員会, 1995・1996）。

在自下ノ畑遺跡 竪穴住居84棟・掘立柱建物20棟が検出される。集落は、庄内式（新）併行期～布留2式併行期のもの（Ⅰ期）、須恵器出現期～陶邑TK47型式までの（Ⅱ期）、陶邑MT15型式～TK217型式までの（Ⅲ期）、7世紀後半～8世

紀のもの（Ⅳ期）に大別できる。時期の直接確定できるものは、40棟前後であるが、切り合い関係で概ね時期を窺うことが出来るものも多い。造り付け竈をもつものが、26棟が確認できる。これらは、須恵器出現以降のものと考えられる。集落の群は、削平が著しい部分もあるが、竪穴住居の時期・重複・占地により、A群～E群の5ブロックに区分される。Ⅰ期では、A群・C群から竪穴住居が現れ、つづいてB群・D群に営まれる。Ⅱ期には、E群が加わり、各群で複数の建物小群が認められる。Ⅲ期は、竪穴住居に確実な掘立柱建物が加わる。Ⅳ期には、7世紀後半に竪穴住居が一部残存するが、小型掘立柱建物の配列は明らかでない。8世紀には区画溝と掘立柱建物が確認できる。重複した竪穴住居が多く、占地にからⅡ期からⅢ期に集落が拡大していることが窺える。大型掘立柱建物の配置、竪穴住居の連続的な重複から、B群・C群が中核部分でなかろうか。B群の大型掘立柱建物は、Ⅲ期のものであれば注目される。C群のSC-55は、一辺6.4×5.8mと最も大きく、L字型の竈を設置する。

在自上ノ畑遺跡では、A・B地区で5世紀後半～7世紀後半の竪穴住居8棟・掘立柱建物5棟が検出される。出土遺物に鳥足文の土器が出土している。

在自小田遺跡では、竪穴住居1棟、大型掘立柱建物1棟、祭祀土壇1基が検出される。大型掘立柱建物は、桁行5間（10m）×梁行5間（9m）で、柱掘方0.7～1.05mで韓式系土器が出土し、5世紀前半に比定される。出土遺物に鳥足文・縄蓆文の土器が出土している。

宮地大ヒタイ遺跡 福間海岸の砂丘上に位置する遺跡で、前期の方形住居8棟が検出される。畿内系の手あぶり形土器が出土する。

手光於緑遺跡 手光の平野部にあたり、溝が検出され古墳時代前期の畿内系土器群が出土する。

神湊浜宮貝塚 神湊の砂丘上に形成された貝塚である。遺跡は東西200m×南北80mの広大なものであり、古墳時代の貝塚としては、玄界灘沿岸で最大級のものであろう。混貝土層には須恵器の小田編年Ⅱ・Ⅲ型式が検出されており、6世紀～7世紀前半に比定される。自然遺物は魚骨（サメ・マダイ類・フグ・クロダイ・スズキ・カツオ・エイ）・貝類（サザエ・アワビ）は岩礁性のものが多く、潜水漁法の存在が予想される。これらに伴って鉄製ヤス・釣針・刀子・骨鏃・鹿角刀装片・土錘が出土している。同様に、小規模であるが新波止貝塚が知られる。また、渡半島の渡蛭子元遺跡では、6世紀後半～7世紀前半の土器・土錘が出土しており、海民的性格を有する（筑紫野史学研究会編, 1971）。

西郷川水系では、香葉遺跡・津丸高平遺跡で5世紀代の遺物が出土する程度で調査例が、少ない。

5-1-3.集落の性格と特質

海浜集落の消長 海浜集落は、背後の小平野・谷水田などの農耕生産の生業を考えることができるが、海岸の漁労も想定される。平野の規模からみて生産性の高い、地域とは考えにくい。古墳群との関連で考えると、造墓の開始される古墳時代中期～飛鳥時代を中心と、ほぼその盛期が一致している点が注目される。集落成立と退潮から、集落間に盛衰が認められる。

海浜集落は、背後の小平野・谷水田などの農耕生産の生業を考えることができるが、海岸の漁労も想定される。平野の規模からみて生産性の高い地域とは考えにくい。古墳群との関連で考えると、造墓の開始される古墳時代中期～飛鳥時代を中心と、ほぼその盛期が一致している点が注目される。

集落成立と衰退から、集落間に盛衰が認められる。特に、圃場整備に伴う調査成果から、その全貌を全て示しているとは言いきれないが、大きく画期を求めることができる。

前期の集落（庄内～布留新）は、勝浦井ノ口・勝浦坂口遺跡、生家釘ヶ浦・在自下ノ畑遺跡などの遺跡があり、弥生時代後期末から出現するものが、前期からの二種が知られる。いずれも、数棟の単位群から構成され、小規模なものが多い。

中期の集落（TG232～TK23）は、勝浦・練原・奴山・在自遺跡群の多くの遺跡が、この時期に竪穴住居の集落や遺物が出土する。最も特徴的なのは、造り付け竈持つ住居が出現する点である。渡来系の陶質土器・朝鮮系軟質土器などが出土する。

後期の集落（TK47～TK209）は、前代の拠点集落の周辺に位置する集落が多い。この時期の竪穴住居は、奴山伏原遺跡のように広域に広がるものもあり、地域の最盛期と考えられる。そして、多くの住居に竈が普及するようになる。

飛鳥時代の集落（TK217～MT21）は、中期から継続するもので、6世紀から成立した集落に多くが確認できる。小型の柱掘方の建物時期は、確認できるものが少ないが、多く存在している可能性がある。8世紀以降期の集落は、掘立柱建物で構成される一群で、勝浦裏ノ田B・在自下ノ畑遺跡等で、古墳時代の集落と重複する場合が多い。大型の柱掘方の建物が確認しやすいが、小型の柱掘方の建物は時期を確認できるものが少ない。

注目されるのは、弥生時代後期～古墳時代前期の集落が、丘陵上に立地する場合が多く、海岸から離れた立地となっている。古墳中期になると、海岸に近い平野部や海浜に集落が営まれる場合が増加する。その中には、神湊浜宮貝塚を伴うものがあり、漁労を中心とした拠点集落の形成が開始される。そして、陶質土

器・朝鮮系軟質土器などが散見され、朝鮮半島との交易や渡来人の存在を予想せしめる。竪穴住居は、在自下ノ畑遺跡のSB-55号などで造り付け竈の出現が知られる。後期には、これらの集落群が盛行し、竪穴住居・掘立柱建物が多く出現する。さらに、玄界灘式製塩土器が、小量ながら確認できる。特に、練原大具地区での2間×7間の南北棟が縦列して検出されており、一部総柱構造から倉庫と考えられる。時期は、6世紀中頃以降と推定されており、海上交通に伴う物資収納施設と推察される。在自下ノ畑遺跡でも、大型掘立柱建物が検出され、倉庫と考えられる。7世紀後半～8世紀にかけて、掘立柱建物が集中的に普及し、増加が認められるが、配列が確認されるものはすくないが、柱掘方の大きいものは時期が明確である（花田, 1991）。

集落の類型 集落の基本的な特性を明らかにし、類型化することは容易でないか、地域圏の分業的役割を考える上で必要な作業仮説である。集落の実態に併せて検討する。

海浜集落は、その様相により、A類・B類の2群に大きく区別される。A類は、海岸に立地し、貝塚を形成しない集落で、5世紀～6世紀代に盛行する。漁具は土錘が出土する程度で、顕著なものは認められない。B類は、海に接し貝塚を形成するもので、浜宮・新波止・中津宮境内貝塚などがあげられる。鉄製品、鹿角・骨製品の漁具、製塩土器などが出土する。大型のアワビ・サザエなどから潜水漁法を主とする。さらに、外洋性の魚類も確認でき、船による漁法も想定される。

農耕集落は水稻を基盤とするもので、釣川水系・西郷川水系の平野部に一般的であるが、谷水田に依拠するものも含まれる。赤間地域の吉留京田・富地原神崎屋・富地原川原田・武丸小伏遺跡などが知られる。東郷・南郷地域は、田熊石畑・久原瀧ヶ下・大井三倉・池浦高田・朝町町ノ坪遺跡などが上げられる。一般的な農耕集落である。

竪穴住居の構造 竪穴住居は、前期に長方形プランで2本支柱穴構造と方形プランの4本支柱穴構造のもの二者がある。前者は、富地原梅木SB-1・10、久原龍ヶ下7号住居などがある。後者は、梅木SB-13住居などがあげられる。共にベット状遺構を有しているものが認められる。中期は方形プランの4本支柱穴構造が主流となり、野坂一町間遺跡SB-3・SB-5・9などがあげられる。ほとんどのものに壁溝が認められる。一部、長方形プランのものも残るが、この前後でなくなるようである。造り付けカマドは、在自下ノ原遺跡SC-23号住居に初源的なものが認められ、この集落に類例が多いようだ。後期には、方形プランの4本支柱穴構造が主流となっている。造り付けカマドも、朝町町ノ坪・武丸小伏遺跡などからみると、普及は一般的に6世紀後半以降とみられる。6世紀中葉には、武丸高田遺跡に2

間×2間の総柱の倉庫が認められる。集落としては、吉留下惣原遺跡のように6世紀後半～7世紀初頭に営まれるものがあり注目される。この集落に類例が多いようだ。後期には、方形プランで4本支柱穴構造が主流となっている。造り付けカマドも、朝町町ノ坪・武丸小伏遺跡・在自遺跡群などからみると、普及は一般的に6世紀後半以降とみられる。6世紀中葉には、武丸高田遺跡に2間×2間の総柱の倉庫が認められる集落としては、釣川上流の吉留京田遺跡、富地原遺跡群、中流の久原瀧ヶ下遺跡などは、集落の継続性が著しく、この地域圏の拠点集落と見做される。玄界灘海浜部では、在自下ノ原遺跡・練原遺跡群は規模が大きく、拠点集落とみられる（花田, 1991）。

5-2. 前方後円墳の造墓

5-2-1. 立地と分布と造墓時期と古墳

推定海岸線をもとに前方後円墳の分布を記入すると、津屋崎の古墳群が玄界灘に面して造墓されていることが分かる。一方、内陸部においても、東郷高塚・スベットウ・久原・クヒノ浦・相原E-1号墳などの前方後円墳も海岸線あるいは、後背湿地を視下に見下ろす丘陵上に位置する。つまり、前方後円墳の多くが玄界灘あるいは入海を意識して造墓がなされている。宗像地域は、前方後円墳が現在のところ40基が確認されている。これらは4世紀後半～6世紀末にかけて造墓が行われており、大別して3期に区分される。主な古墳を以下に説明する。なお、旧津屋崎町の国指定史跡津屋崎古墳群に詳しい（津屋崎町教育委員会, 2004）。

造墓Ⅰ期…宗像平野の内陸部に東郷高塚古墳が造墓なされる。古墳は釣川中流域を一望する標高30mの丘陵先端に立地する。古墳時代の3世紀末～4世紀中葉を前半、4世紀後半～5世紀初頭を後半とする。後半は、東郷高塚古墳の造墓以降で、概ね須恵器の出現までとする（花田, 1999）。

徳重本村2号墳 釣川の上流の徳重丘陵に位置する全長18.8mの前方後円墳である。主体部は、長さ2.5m×2.2m、深さ0.3mの木棺土壙墓で、有袋鉄斧が出土する。出土土器から、布留式の古段階に比定される（宗像市教育委員会, 2002）。

東郷高塚古墳 古墳は墳丘長64.4m、後円部径39mで高さ3mの盛土を行い、前方部を玄界灘に向けている。周囲には馬蹄形の外堤が後円部側に認められる。内部主体は、古墳主軸に平行する粘土槨で、割竹形木棺を納める。棺の構造は、掘方の小口板を挟む方法の木棺で内法が長さ52m×幅0.5mを測る長大なものである。副葬品は、勾玉4・管玉4・鉄刀・鉄鉾1などが出土している。また、土師器の壺が墳丘に供献されていたようである。造墓時期は、4世紀末を中心とする年代が与えられている（宗像市教育委員会, 1989）。

田久瓜ヶ坂1号墳 釣川を見下ろす田久に位置する全長32mの前方後円墳である。4つの内部主体があり、割竹形木棺2・円筒棺・土器棺を埋葬主体とする。鉄器の鉄斧2・鉄鍬先1などが検出される。円筒棺は、畿内周辺・吉備などに分布の中心があり、4世紀後半の造墓と考えられている（宗像市教育委員会, 1999）。

徳重本村2号墳は、宗像に前方後円墳が成立する最古の古墳にあたり、古墳時代前期初頭に小規模であるが、導入された意義は大きい。次ぎに、布留式の中段階に全長30.8mの田久瓜ヶ坂1号墳が造墓され、4世紀中～後半に続く。このように、この時期の古墳に共通する特徴がある。①、20m前後の小規模なもので、中心主体が複数ある。②、古墳の周辺に埋葬施設が多数あり、特定首長層の血縁集団とみられる。先行する庄内式期の土器交流からみて、玄海灘の交易に伴うものと見なしたい。この時期は、各地勢圏の一つを単位とするものであろう。全長62mの東郷高塚古墳とは、明らかに規模・埋葬法が異なり、4世紀後半の大型の定型化した葬法の導入と捉えられる。東郷高塚古墳の成立は、釣川地勢圏の3世紀末～4世紀中葉までに、地域統合が進み盟主首長となったとみる（花田, 1999）。

前期の円墳 上高宮古墳は、直径23mの円墳であり、箱式石棺を主体部とする。鏡・短甲・鉄鍬などが出土する（島田, 1939・田中, 1938）。同時期の大型円墳に大井平野1号墳は、直径23mの円墳で、箱式石棺・割竹形木棺などが、同一墳丘に営まれている。

大井池ノ谷古墳群は、直径10～15mの古墳4基からなる。主体部は、箱式石棺・割竹形木簡・石蓋土壙・竪穴式石室の主体部を複数が共有される。3号墳で獣形鏡・竪櫛・ガラス玉などが出土する。

下平井では、15～20mの3基の円墳が確認され、箱式石棺・割竹形木棺が主体部となる。1号墳では、鏡・竪櫛・鉄鍬などが出土する。

久戸6号墳では、17.5mの円墳で、箱式石棺の主体部に三角板革綴短甲などが、出土する（酒井, 1979）。井手ノ上古墳は、直径26mの円墳で、箱式石棺から三角板革綴短甲・鏡が出土している（津屋崎町教育委員会, 1991）。これら以外に、朝町妙見古墳・鏡を出土した福間割畑1号墳などがある。

造墓Ⅱ期…玄界灘に面した津屋崎町に8基が集中し、視下には津屋崎入海が広がっている。造墓時期は、5世紀前葉～6世紀中葉にかけて前方後円墳が継続して営墓される。

新原奴山22号墳 新原丘陵の中央部に位置する前方後円墳とされ、墳丘長75～80mと推定される。後円部径は54m、高さ7.8mで2段築成となっている。後円部墳頂に縫殿宮跡が存在し、周囲に幅8mで周壕が廻る。前方部は開墾によって大半が削平されている。墳丘からは、朝顔形、円筒埴輪が多量に出土している。内部

主体は未調査のため不明である。また、くびれ部南側に15mの奴山21号墳があり、この古墳を避けて22号墳が造墓されている。造墓時期は、陶邑TK73型式併行期と考えられる。

勝浦峯ノ畑古墳 玄界灘を望む勝浦の小丘陵上に立地し、前方部を海に向ける前方後円墳である。墳丘は削平が著しいが全長97mに復元される。古墳の規模としては宗像地域で最大のものである。内部主体は後円部南西に開口する単室の横穴式石室である。石室は長さ4.3m、幅2.5m、玄門部で2.25mのいわゆる羽子板状の平面プランを呈する。壁面は垂直2.18mほど積み上げ、天井石に柱を架構している。羨道は、長さ3.25mで石材を平積みしている。特に玄室内には2本の石柱があり、空間を3ブロックに区分し、仕切り石で屍床を作っている。また、石室内には赤色顔料が塗付されていた。副葬品は、鏡（画文帯神獣鏡1・内行花文鏡1・珠文鏡7面）・武器（鹿角製装具付大刀40以上・鹿角装具付剣4・素環頭大刀または剣1・銀製鞘尻金具1・鉄鏃300本以上）・武具（短甲）・工具（鹿角製装具付刀子6・刀子22・装身具・銅剣1・ガラス連玉6・ガラス玉10,565・琥珀棗玉92・勾玉8・碧玉・管玉4・硬玉・勾玉1・ガラス管玉1）須恵器などが多量に出土している。造墓時期は5世紀後葉前後と考えられている（石山, 1977）。

勝浦井ノ浦古墳 峯ノ畑古墳東側の90mに位置し、前方部を南西に向ける3段築成の前方後円墳である。古墳は墳丘長70m、後円部径37m、前方部幅37mである。内部主体は前方部の主軸に直交して北西方向に開口する竪穴系横口式石室である。石室は長さ42m、幅25m、横口部で0.95mを測る。石室高は1.3mで当初の高さもこの程度と考えられる。壁面には赤色顔料を塗付する。横口部は1mほどの石積みが設けられている。副葬品は、武器（鉄矛1・石突1・挂甲小札約3,000・挂甲金銅張小札51・短甲23・三尾鉄2・大刀1・鉄鏃160以上）・工具（鉄斧2）・馬具（三環鈴1・鉄地金銅張杏葉1・木心鉄板被壺鐙1対・鉄地金銅張鉾留金具22・鉾留金具10・鉸具10・轡2・金銅張磯金具・鞍金具）・装身具（大葉形金具）などがある。ただし、これらのものが前方部石室から出土しており、後円部の主体部については未調査である。また、前方部墳丘下で3棟の竪穴住居が検出されており4世紀末頃とされる。造墓時期は5世紀末葉前後と考えられている（石山, 1977）。

新原奴山1号墳 新原の低丘陵に営まれた前方後円墳で、全長50m、後円部径29m、前方部幅31m前後と復元されている。墳丘は縦方向に削平されており、前方部高3.7m、後円部高4.6mで全て盛土となっている。内部主体は、後円部に南西に開口する単室の横穴式石室である。石室は全長6.5m、玄室内法長3.3m×幅2mで玄門部1.65mとなり、羽子板状の平面プランを呈す。高さは15mで平天井であ

り赤色顔料が塗付されている。玄室は仕切り石で屍床が設けられ、玄門部に2本の立柱で袖を形成している。羨道部は長さ2.9mでハ字状に開く。副葬品は石室内で装身具（ガラス小玉）・工具（手斧1）・武具（衝角付1・綴片・鋌留式短甲・小札・頸甲・肩甲）・武器（直刀・剣・短剣・鉄鏃・鹿角刀装具）・馬具（鐙）・羨道部で工具（錐・鏝・鉄錐・鋸）などが多量に出土している。造墓時期は墳丘より出土した須恵器（甕・器台・高杯）などから陶器TK208型式に比定される（橋口, 1989）。

新原奴山12号墳 新原丘陵の高所に立地する全長4.3mの前方後円墳で、後円部径25m、前方部幅29.5mを測る。内部主体は未調査のため不明である。また墳丘の周囲に幅5m前後の平坦面が存在し、墳丘の形状と一致していることから周堤帯のようなものと考えられる。造墓時期は墳丘より採集された須恵器（甕）により5世紀後半の年代が与えられている（橋口, 1989）。

新原奴山24号墳 22号墳の北側に位置する前方後円墳で、墳丘長53.5m、後円部径28.5m、前方部幅24mを測る。古墳の周囲には幅4mの周堤があり、外側に幅6～7mの周堤が存在する。内部主体は未調査であり不明であるが、墳丘より採集された須恵器から陶器TK216型式併行期と考えられている（橋口, 1989）。

新原奴山30号墳 盟主墳である22号墳東側に位置する前方後円墳である。古墳は墳丘長54m、径円部径27.5m、前方部幅34mを測る。古墳の周囲には周壕の痕跡を留める畦畔があり周壕を有するものと考えられる。墳丘は全て盛土で後円部高さ8m、前方部高4mを測る。内部主体は不明であるが、墳丘より須恵器が採集されており、陶器TK216型式併行期前後と考えられている（橋口, 1989）。

生家大塚古墳 新原奴山古墳群の南側500mの生家丘陵上に位置する前方後円墳である。前方部は鞍部を除いて昭和44年頃に削平されている。後円部径35m前後からすると、推定墳丘長は73mであろうと思われる。後円部は2段築成である。内部主体は未調査のため不明であるが5世紀代のものと考えられる（津屋崎町教育委員会, 1996）。

造墓Ⅲ期…前方後円墳は、津屋崎の須多田丘陵に5基と宗像内陸部に7基、玄海に9基、福岡に1基の計19基が確認できる。造墓時期は、須多田丘陵が6世紀代、内陸部が6世紀中～末のことが多い。

須多田天降神社古墳 須多田丘陵の中央部に位置し、前方部を西へ向ける墳丘長80mの前方後円墳である。古墳は、御神体となっており、保存状況が良好であり、2段築成の墳丘が明瞭に認められる。後円部は径35～40m、前方部幅30mで、周囲27.5～8mの周壕が全周する。その外側には、幅2～3mの周堤が認められる。内部主体は未調査であるが墳丘から円筒埴輪・須恵器が採集されており、6世

紀中葉の造墓と考えられる（津屋崎町教育委員会, 1996）。

須多田上ノ口古墳 天降神社古墳の東側に位置する前方後円墳で全長43mを測る。後円部径は18～20m前方部幅22mを測り、保存状態が良好である。墳丘は全て盛土で、前方部高4.5mを測る。造墓時期等は不明である（津屋崎町教育委員会, 1996）。

須多田ミソ塚古墳 須多田丘陵の南辺に位置し、前方部を南西に向ける墳丘長60mの前方後円墳である。墳丘は削平によって著しく改変している。後円部は径20m前後、前方部幅15～20mに復元できる。造墓時期は6世紀後半に比定される。

須多田下ノ口古墳 須多田丘陵の南辺に位置し、前方部を南西に向ける墳丘長83mの前方後円墳である。墳丘は後円部を残し削平され、著しく改変している。後円部南には、かつて横穴式石室が露出していたという。前方部は、発掘調査によって、周濠が検出されている。2重周濠とすると、類例が少なく注目される。前方部周濠からは、須恵器が出土しており、6世紀末の造墓と考えられている（津屋崎町教育委員会, 1996）。

在自剣塚古墳 在自丘陵上奥部に立地し、前方部を南西に向ける2段築成の前方後円墳である。古墳は近年の測量調査で、墳丘長102m、後円部52.5m、前方部幅63m前後を測り、後円部背後の丘陵を切断して造られる。墳丘は、現在みかん園となっており削平が著しい。江戸時代の記録によると、内部主体は横穴式石室であり、造墓時期が6世紀末前後と考えられる。宗像最大の前方後円墳である（津屋崎町教育委員会, 2004）。

相原E-1号墳 宗像平野中流域の相原丘陵、北東へ伸びる小尾根の先端に築造される。墳丘は、残存長62mを計測し、後円部直径28～30m、高さ9mである。前方部幅は残存16mであり、推定23mで高さ2mを測る。推定復元全長は、70m前後と考えられる。宗像内陸部で最大級であり、主体部の複室横穴式石室も最大のものである。横穴式石室は、後円部中央より、主軸に直角に西側へ開口している。墳丘は、前方部を地山整形で削り出し6mの盛土を行っているが、後円部は高さ10mほど盛土を行っている。石室は羨道部を失っているが、複室の横穴式石室であり、南西方向に開口する。石室の全長は8.74mであり、玄室は長さ3.75m×幅2.3mの縦長のプランを呈す。奥壁より、1.27mの位置に4石からなる仕切り石があり、屍床を設けている。床面は、仕切り石前面より20cm低くなっている。前室は、玄室に比べて小振りの腰石が両側に配置され2.8mの高さで天井石となる。出土品は、鉄製品（挂甲・刀子・鉄刀・鉄鏃・馬具）・金銅製品・玉類・鉄滓・土器などがある。造墓は、少量の須恵器が6世紀後葉のものであり、複室構造の石

室からも、ほぼ一致するものと考えられる。特に挂甲をはじめとした鉄製品・馬具・金銅製品・鉄滓の出土があり、首長墓と考えられる（花田, 1991）。

城ヶ谷3号墳 城山西麓の丘陵上に位置し、61基からなる城ヶ谷古墳群の中央部に位置する。3号墳は、全長22mで、前方部と後円部の一部に区画溝が残存している。主体部は2つあり後円部の大石室は、長さ3.5m×幅2.3mで長方形プランを呈し、框石を設け、墓道となる。竪穴系横口式石室である。前方部の石室は、長さ1m×幅0.6mの竪穴系横口式の小石室である。石室は、共に同時期とされており、大石室に追葬が行われているのに対し、小石室は、単葬と考えられる。出土遺物は、大石室から、耳環に鉄鏃、留金具・刀子・須恵器・土師器が副葬されていた。小石室からは、土製丸玉・土師器が出土している。造墓時期は、6世紀中葉とされる（波多野, 1977）。

名残高田25号墳 釣川上流部の名残の北へ伸びる丘陵上に60基前後からなる名残高田古墳群が立地する。古墳は、全長30mの前方後円墳で丘陵頂部に立地している。内部主体は、玄室長3.5m×幅1.6mの横穴式石室と考えられる。出土遺物は、鉄鏃・鏢・刀子・須恵器が出土する。造墓時期は、6世紀後半に比定される。

徳重高田16号墳 16基からなる古墳群で、そのうち1基が前方後円墳である。削平のため全長が明らかでないが全長22.5m前後と考えられている。主体部は、単室の横穴式石室で、6世紀後半の造墓と考えられる。また、人形土製品が出土している。

スベットウ古墳 東郷田熊の小丘陵北端に位置する前方後円墳で、全長35～40mと考えられる。主体部は、竪穴系横口式石室で、長さ3.8m×幅2m、高さ3.8mのやや胴張りの長方形プランを呈する。玄門部には框があり、墓道が上方へ上がっている。出土遺物は、挂甲・鉄鏃・刀子・帯金具・金銅製品・ガラス製小玉719個・瑪瑙の切子玉・須恵器片が出土している。造墓時期は石室の形態より、6世紀前半に比定される（波多野, 1967）。

久原澤田II-3号墳 久原丘陵の中央に位置し、前・中期の円墳を含む52基からなる大古墳群である。II-3号墳は、全長45mで、後円部径26m、前方部幅20mを測る。墳丘の周囲には、丘陵部側に周壕・周堤が確認されている。また、墳丘上に円筒埴輪・家形埴輪・人物埴輪が出土している。主体部は、全長5.5mの単室の横穴式石室で西側のくびれ部に向かって、墓道が開口している。出土遺物は、鉄鏃・刀子・鉄斧・鉈・馬具（辻金具・馬鈴）・須恵器（器台）が出土している。時期は、6世紀中葉の造墓とされる。また、宗像内陸部で唯一の埴輪を有する古墳である（宗像市教育委員会, 1988）。

須恵クヒノ浦古墳 須恵丘陵の南端に位置する全長37mの前方後円墳で独立し

て1基ある。内部主体は、全長6.8mで玄室長3.8m×2.1m高さ3mを測る比較的大型の石室である。石室は、四周がせり出し合掌形を呈し、赤色顔料が塗付されている。床面は、敷石がなされ、石障と呼ばれる石列が認められる。横穴式石室は単室であるが、羨道部の石組みから、複室構造への移行期のものと考えられている。出土遺物は、鉄刀・鉄鏃・刀子・鋸・玉類が出土している。造墓時期は、6世紀後葉と考えられている。

瀬戸1号墳 前方部を北へ向けた墳丘長25mの前方後円墳である。後円部は、径14m、前方部幅10mで、砂丘上に厚さ2～3mの褐色砂質土を盛土としている。内部主体は、主軸に直交する縦穴系横口式石室が検出されている。副葬品は、馬具・須恵器（器台・蓋）などが出土している。造墓時期は、須恵器より6世紀初頭と考えられている。

瀬戸4号墳 2号墳の南側へ30mの同丘陵上に立地し、東西方向に主軸を有する前方後円墳である。墳丘は全長38m、後円部径25m、前方部幅19mを測る。内部主体は、単室の横穴式石室で、玄室長4.33×幅2.3mを測る。発掘調査の結果、胡籙・鉄鏃・挂甲・小札・管玉・馬具（剣菱形杏葉・雲珠）などが出土した（宗像市教育委員会, 2007）。

上林2号墳 鐘崎に近い田野丘陵に立地する全長32mの前方後円墳である。後円部と前方部は主軸方向に幅6mを残し、両側が削平されている。後円部径は1.8m前後であり、その中央に南に開口する横穴式石室が存在する。石室は、奥壁の一部が露出し、小振りの石材を小口状に積んでいる。また、墳丘は、幅10mの赤褐色と灰色土を交互に盛土を行っている。造墓時期は、6世紀代と考えられる。

桜京2号墳 約100基からなる牟田尻古墳群に所在する宗像唯一の装飾古墳である。前方部を西へ向ける墳丘長41mの前方後円墳である。古墳は尾根鞍部に立地し、主軸に直交し、北側に複室の横穴式石室が開口している。玄室は、幅1.8m×長さ3.5mで奥壁に石棚が設けられ、両側に立柱が認められる。前室は、幅1.3m×長さ2mで、幅6m×幅0.6mの羨道となる。特に玄室の石棚下の奥壁、立柱に装飾が認められる。奥壁は、大型の石材を上下に2段、縦2～7段に線刻に分割し、その中に赤・緑の連続三角文を配している。2本の立柱にも正面と石室形内側に、線刻にて分割線を残し、後に連続三角文を施している。造墓時期は、6世紀後半と考えられる（宗像市教育委員会, 2005）。

牟田尻スイラA-4号墳 牟田尻古墳群（池田支群）の丘陵頂部に立地する全長33mの前方後円墳である。後円部は、陥没しており、横穴式石室が内部主体と考えられる。造墓時期は、6世紀中頃のものであろう。

牟田尻片峰E-7号墳 牟田尻古墳群の丘陵頂部に立地する全長20mの前方後円

墳である。南へ開口する玄室長2.1m×幅1.8mの横穴式石室である。出土須恵器により、6世紀の造墓とされる。

牟田尻母倉1号墳 牟田尻古墳群の丘陵頂部に立地する全長35mの前方後円墳である。

牟田尻母倉9号墳 牟田尻古墳群の丘陵頂部に立地する全長30mの前方後円墳である。

牟田尻古墳群は、前方後円墳4基を含む大型群集墳であり、神湊浜宮貝塚などの海人集団の擬制的同族集団の墓地であろう。多くの前方後円墳は、6世紀～7世紀前半までに収まる年代と推察される。

神湊上野1号墳 神湊の独立丘陵上に立地する前方後円墳で、墳丘長40m前後と考えられている。内部主体は、横穴式石室が森貞次郎氏により発掘調査され、6世紀代のものと考えられている。詳細は、未報告のため不明。

手光大人4号墳 福津市の小平野北側の手光丘陵に立地する。墳丘長40～45mの前方後円墳である。墳丘は、中世の亀山城の一部として利用されている。内部主体は、玄室長3.3m×幅2.2mの複室の横穴式石室で6世紀後半と考えられている。これ以外に近年の分布調査、発掘調査によって、数基の前方後円墳が確認される。

Ⅲ期のものは、宗像市における前方後円墳の分布や形態から、小地区の系列を認めることができる。東郷・南郷地区は、スベットウ古墳→久原澤田Ⅱ-3号墳、河東・城山地区は城ヶ谷3号墳→須恵クヒノ浦古墳とみる。赤間・吉武地区では名残高田25号墳→徳重高田16号墳へ、それぞれ造墓系列が把握される。

田野地区では、瀬戸2号墳→瀬戸4号墳→上林2号墳、牟田尻地区では、牟田尻片峰E-7号墳、牟田尻スイラA-4号墳→桜京2号墳（装飾）の造墓系列が捉えられる。一方、須多田丘陵の4基については、年代が不明瞭であり、系列の把握は困難である。いずれにせよ、首長墓である天降神社古墳→在自下ノ口古墳・在自剣塚古墳と相原E-1号墳にみられるように、造墓の中心が、須多田系譜と宗像内陸部系譜が認められる。同様に5世紀代に津屋崎に集中していた墓域は、6世紀になると、須多田系譜の首長墓群と、内陸部を中心とした群集墳の分布圏を中核とし、造墓が一般化し終焉を迎える。

造墓Ⅳ期…前方後円墳の造墓停止後に墳形がほとんど円墳となる。宮地嶽古墳・手光波切不動古墳は、津屋崎の宮司・手光に位置するが、宗像内陸部では顕著なものは少ない。

宮地嶽古墳 墳丘は、緩斜面の尾根を切断し、地山整形を行い築造している。規模は、南北27m×東西34m前後の楕円形を呈す。墳丘上には、厚さ2mほどの昭

和9年以前の二次盛土が認められる。南側は、崩壊に伴う崖面で石櫛上まで抉れる。周囲の列石は、幅1m、高さ1.4m前後のものを立て全周に廻し、北側に高く羨門石に連なり、羨道両側に石列が3段積み上げる。列石は墳丘周囲を削平し、昭和9年以前に設置され、本来は直径35m前後の円墳と考えられる。ただ、墳丘の改変が著しいため、今後墳形とも併せて検討する必要がある。切石系横穴式石室の全長は、23.1m前後となり、宗像屈指の古墳であり、7世紀のものとしては奈良県石舞台古墳に匹敵する（池ノ上・花田, 1999）。

手光波切不動古墳 手光丘陵に立地する直径25m前後の円墳である。主体部は、南に開口する切石の横穴式石室である。玄室は基本的に幅1.3m×10.6mの平面形を呈し、奥壁から両側壁より狭くなっている。側壁は、切石を5石ほど用いている。天井は、2石目の広がる空間部分で段を設けて、入口部1段低くした天井とする。したがって、形態から奥壁より2石目までが玄室、入口部の3石が羨道と理解されよう。玄室は、広がる部分に高さ0.5mの仕切石があり、屍床の区画であろうか。石室は、奥壁より玄室が広がる特徴は、宮地嶽古墳に類似する。造墓年代は、7世紀代中頃と考えられるが、詳細は不明である（池ノ上・花田, 1999）。

これらの他に直径30mの円墳で、複室横穴式石室の田野桜3号墳がある。

5-2-2.新原奴山・須多田古墳群

有力首長層の特定墓域は、5世紀前葉～6世紀中葉に、勝浦・新原奴山・須多田地域の丘陵上に営まれた。これらは、単一地域でなく、3ブロックに分布しており、その理由が何に起因するか検討したい。

新原奴山古墳群は、低丘陵上に大小45基からなる古墳が縦列している。その分布は、西側の22号墳を中心25基の前方後円墳と3基の大型円墳、方墳が等間隔で立地する。小型円墳は、西側の大型古墳の背後と東側に分布している。造墓時期でその形成をみると5世紀前葉～後葉にかけて、小丘陵に22号墳を中心に奴山川あるいは、入海から遠望できる配列である。詳細な順位は、21号墳（小円墳）→22号墳・7号墳（陶邑TK73）→20号墳、24号墳（TK216）・11号墳、25号墳（TK208）→30号墳（TK47）→12号墳（5世紀後半）と考えられている。したがって、前方後円墳、大型円墳、方墳は、系列的に造墓がなされている。一方、6世紀代の小円墳群は、2～3基を単位とした群集墳であり、横穴式石室を内部主体とするものである。そのうち、2～6号墳について調査がなされており、宗像タイプと呼べる縦穴系横口式石室の流れをくむ24号墳（陶邑TK10）→3・5・6号墳（MT85～TK43）が発掘されている。その規模も6世紀前半では径1.3m前後であるのに対し、後半になると径10m前後となり、小型化が認められる。したがって、5世紀代のものと、6世紀代のものを同質あるいは同列の系譜と考えるに無理

がある。副葬品においても前者が武具・工具・馬具・武器などの鉄器副葬品が著しいが、後者は、土器・装身具を中心としたものに少量の武器（鉄刀・鉄鏃）・馬具が含まれており、格差が認められる。

群構成においても、6世紀代のものが、奴山の小平野からみると、25号墳の背後（26～29号墳）、22号墳の背後（15～19号墳）、西側の空間地、東側の山麓側と、いずれも、前代の古墳を意識した構成をなす。その中で、34号墳は、直径24mの円墳で、内部主体が横穴式石室であり、奥壁に石棚を有する構造のもので、6世紀後半と考えられる。したがって6世紀代は、前方後円墳という墳形の採用はできなかったが、34号墳が小首長級の被葬者と考えたい。一方、周囲に目を広げるなら、北側に径30mの奴山正園古墳（5世紀前葉）、南側に全長60～70mの前方後円墳である生家大塚古墳がある。前者が、奴山平野、後者が生家の入海を見下ろす立地を取っている。したがって、5世紀代が、宗像の有力首長に関連する古墳群、6世紀代が奴山平野を中心とした小首長級の古墳とその構成員の古墳群と理解できよう。この点は、須多田古墳群と様相を異にしており、首長墓系譜の性格を窺う上で重要な視点となる。

須多田古墳群は、大きく、須多田川流域の小平野北側に立地する一群（須多田上ノ口・天降神社古墳・須多田下ノ口・須多田ミソ塚古墳）、在自川北側の一群（在自剣塚古墳）、大石集落山麓の一群（大石岡ノ谷1号・2号墳）などを包括した一群を呼称する。古墳の分布域が広く、未調査のものが多く、圃場整備に伴う発掘調査・測量によって、首長墓の年代が判明する。4世紀後半に須多田宮ノ下古墳（円墳）が知られる。5世紀代は、須多田ニタ塚古墳（5世紀後半）が入海に最も近い位置に立地する。径36mの大型円墳である。内部主体は、古式の横穴式石室で、新原奴山1号、勝浦峯ノ畑古墳が類似することから、5世紀末葉の年代が考えられる。いずれにしろ、この2基が該当するものであろう。6世紀代は、須多田丘陵中央部に全長80mの天降神社古墳が造墓される。周壕を有し墳丘に埴輪、葺石を配するもので、6世紀中葉と考えられる。これに続く須多田下ノ口古墳と在自剣塚古墳も、6世紀末に並存すると考えられる。このように、6世紀後半においても盟主首長墓の造墓がなされる。また、須多田ミソ塚、上ノ口古墳も6世紀後半代に比定されよう。一方、対馬見山山麓部には、横穴式石室を内部主体とした群集墳が造墓されるが、その数は決して多くない。

このように5世紀末葉の須多田ニタ塚古墳の大型円墳の造墓に始まり、須多田天降神社古墳を中心とする6世紀中頃の一群、そして後半～末の須多田下ノ口古墳と在自剣塚古墳の盟主首長墓、山麓の群集墳という流れを読み取ることができる。

したがって、大型円墳、前方後円墳が集中する5世紀末～6世紀末と、群集墳が

造墓される6世紀後半～7世紀代のものは区分して理解できよう。これらのことは、新原奴山古墳群にも同様の現象が認められる。これらの群以外に、勝浦峯ノ畑古墳・勝浦井ノ浦古墳・勝浦高原11号墳が首長墓と見なされる。ただし、3基が勝浦地域に立地しており、他は、山麓の群集墳があるにすぎない。したがって、奴山・須多田古墳群のあり方とはやや異なる。

以上のことから、勝浦・新原奴山・須多田古墳群の成立、展開を理解するならば、津屋崎入海の中央部にまず新原奴山22号墳が造墓され、続いて24号→1号→30号→12号墳の順で前方後円墳と大型円墳の造墓がなされる。5世紀後葉～末に勝浦峯ノ畑古墳・勝浦井ノ浦古墳→勝浦高原11号墳の3基が続いて造墓が行われる。須多田古墳群では、現在のところ、須多田ニタ塚古墳（円墳）のみであり、前方後円墳の造墓は須多田天降神社古墳→須多田下ノ口古墳・在自剣塚古墳のように6世紀中～6世紀後半代まで認められない。

したがって、盟主首長墓は勝浦地域が、5世紀後葉～6世紀前半に3基のみで造墓が終了、新原奴山古墳群では5世紀前～末葉までの長期造墓が行われ、須多田古墳群では6世紀前葉から7基の造墓が開始され、6世紀が中心造墓時期となっている（池ノ上, 1998）。

古墳群の分布から、津屋崎入海の中央部で、まず前方後円墳の造墓が開始され、新原奴山、勝浦そして、須多田古墳群のように入港を意識した造墓となっている。特に墓域の計画においても、勝浦が首長墓と同族墓、新原奴山が首長墓と有力小首長を含む同族墓で、東西400m×南北100mの墓域内に造墓がなされる。一方、須多田の場合、前方後円墳、あるいは大型円墳も散在的な分布を示しており、広域で規則性が非常にとぼしい。しかし、7世紀前半には宮地嶽山麓に首長墓を含む造墓Ⅳ期は、北九州全体に前方後円墳の墳形が消滅し、宮司・手光地域に墓域が再び設定され、8世紀代まで氏墓として営まれている。全てが円墳の葬法となる。

5-2-3.群集墳

5世紀代の首長墓が、勝浦～須多田地域に造墓されているのに対し、横穴式石室を内部主体とする円墳群は、内陸部の宗像・福岡平野を中心に造墓がなされている。その墓域は、前代のⅠ期の造墓地を踏襲したものが多く、古墳時代前期以来の小地域圏に基づくものであろう。分布は、5世紀中～7世紀にかけての古墳が、小平野に面した丘陵上に約1,900基が周知されている。そのうち最も多いのは、6～7世紀の群集墳である。これらは、大別して10地区に分布している。この内、約500基について発掘調査が実施されている（埋蔵文化財研究会, 1998）。

田野地区 湯川山西麓の丘陵に立地する上八辻（6基）・上八赤坂（3基）・上八北

谷(28基)・名見(6基)・池田大古野(24基)池田仏の前(4基)古墳群で約50～60基が周知されている。そのうち、池田大古野古墳が最大規模で直径8～15m前後の円墳で構成されている。内部主体は、横穴式石室が主流を占める。特に17号墳は、直径26mの円墳で、複室の横穴式石室で、7世紀初頭と考えられる。いずれにしても、6世紀後半～7世紀前半の造墓と推察される。また、田野桜3号墳は、直径30mの円墳で、複室の横穴式石室を内部主体とするものであり、池田大古野17号墳とともに7世紀前半における中核となる古墳である。この一帯は、上林・桜・大古野古墳群が、みかん園造成、瀬戸古墳群が土取りですでに大半が破壊されている。この地区で調査が行われたものは、瀬戸1・4号墳(前方後円墳)と田野小路境1・2号墳22があげられる程度である。いずれにせよ、田野の平野部あるいは、鐘崎の海浜集落の人々(海人)の墓域と考えられる。

吉田地区 宗像神社(田島)の東側の丘陵上に分布する吉田小林(2基)、吉田床(2基)、吉田安入寺(4基)、吉田向(1基)、多礼暮ヶ浦(2基)、鎮国寺山(11基)、多礼岩ヶ鼻(2基)古墳群で、20～30基が周知されている。古墳は、横穴式石室を内部主体とするものがほとんどで、直径10～18m前後からなる。吉田床3号墳は、直径22mの円墳で、横穴式石室を内部主体とするもので、中核の古墳といえる。この地区は、玄界灘の入海が深く入ると考えられ、農耕の生産基盤は、広いものといい難い。いずれにせよ、6世紀後半～7世紀前半を中心とする造墓と考えられる。

牟田尻地区 釣川河口西側の丘陵に分布する牟田尻古墳群と勝浦乗鞍(13基)・勝浦水押(4基)・勝浦高原(7基)・神湊上野(2基)・鍋田(10基)・神湊井牟田(3基)古墳群からなる。牟田尻古墳群は、スイラ(12基)・井下(4基)・羅漢・(23基)・池田(15基)・田向(3基)・桜京(2基)・鳥越(3基)・鳥越下境右(4基)・下浦(10基)・片峰(20基)・東方ヶ浦(10基)の11支群の95基からなる。ゴルフ場の建設に伴う調査で、更に古墳数が増加し、約130基の大型群集墳である。古墳は、直径8～22m前後の円墳で、横穴式石室を内部主体とするものがほとんどである。調査がなされているものは、桜京2号墳(装飾)などであるが、池田支群からは、6世紀末～7世紀初頭の平瓶・紡錘車が出土している。また、ゴルフ場建設に伴う調査で、中浦3号墳から、金銅製杵・金銅製馬具など、注目すべき遺物が出土する。いずれにせよ、6世紀後半～7世紀前半代の造墓が主体と考えられる。

また、神湊では井牟田1～8号墳が調査されている。内部主体は、2～4号が複室の横穴式石室で、鉄器(鉄鏃25・刀子6・直刀6・鉄斧2)・耳環(9)土器が出土している。造墓時期は6世紀後半とされる。また4号墳は、複室の横穴式石室で、玄

室が方形プランを呈す。出土遺物は、銅腕・装身具・ガラス玉4・琥珀玉2・鉄鏃7・刀子・鏢2・刀2・土器が出土しており、6世紀末～7世紀中葉に比定されている。この地区は、神湊浜宮貝塚の海浜集落にみられるように海人集団を被葬者に考えることができよう。

在自・宮司地区 宮地嶽北西麓に分布する在自大在自(13基)・津屋崎大力様(30基)・浦田ヶ浦(27基)・宮司井手ノ上(3基)・宮地嶽(3基)古墳群の69基が周知されている。山麓の古墳群は、直径8～10m前後で横穴式石室を内部主体とする。清田ヶ浦古墳群では、直径8～12m前後の円墳が11基からなり、竪穴系横口式石室(2号)と横穴式石室を内部主体とするものからなる。前者は6世紀前半、後者は6世紀末～7世紀代前半に比定されよう。副葬品は、武具(刀剣・鉄鏃・鉄鉾)・装身具(丸玉・小玉・管玉・連玉・切子玉・琥珀玉・耳環・金製空玉・勾玉)・工具(刀子)・鉄滓・土器類が出土している。この一帯は群集が著しく、在自・宮司地域に居住する集団の墓域を考えられる。

手光・津丸地区 西郷川流域の北岸に分布する手光(39基)・津丸(33基)・八並千田(27基)などの146基が周知されている。その分布は、やや密集度に欠けるが、単位群が明らかなものが多い。津丸では、野間尻1号墳が竪穴系横口式石室であるが唯一のものであり、野間尻2～6号墳・長尾・飛塚古墳群など大半のものが横穴式石室を内部主体とする。造墓時期は、前者が6世紀前半、後者が6世紀後半～7世紀初頭と考えられる。手光古墳群は、小尾根上に5世紀前半～6世紀後半にかけての13基の古墳が調査されている。古墳は直径10～14mのものが主体であるが、径20m級の南2・5号墳・北2号墳は全て複室の横穴式石室で6世紀中～後半の造墓である。副葬品は、武器(刀・矛・鉄)・馬具(辻金具・轡・鉸具・雲珠)・工具(刀子・鉋)装身具(耳環・玉類)などが出土している。西郷川流域の南岸では、主なもの、上西郷大森(12基)、上西郷馬ヶ谷(9基)などがあり、本木・内殿・上西郷などで95基が確認される。これらの墓域は、西郷川流域の集団の造墓と考えられる。

渡・塩浜地区 古代において、島峡をなしていた渡・塩浜は、農耕生産基盤が認め難いのに渡水上(6基)・渡入津加(2基)・森山(23基)・池尻(1基)・塩浜(4基)の約33基が周知されている。これらの古墳群は、いずれも海拔50～70m上の丘陵上に分布するものが多いが、塩浜古墳のように海拔3mの古砂丘上に造墓されるものも認められる。このうち、水上古墳群で1基が調査され、6世紀後半の横穴式石室を内部主体とする円墳であることが判明している。また、森山古墳群は、径8m前後の円墳群であるが、封土に塊石を用いて積石塚状を呈しており特異である。内部主体は、横穴式石室と思われる。このようにこの地区の集団は、

海民集落の集団の被葬者が窺える。

奴山・須多田地区 この一帯は、5世紀～6世紀前の首長墓域となっていたが、群集墳は新原奴山（36基）、須多田（10基）、生家（1基）、音ヶ裏（2基）の計49基が周知される。詳細は前述したとおりである。

河東・城山地区 釣川中流域の北岸に分布する一群で、横山川流域の久戸（37基）・河東（2基）・稲元（8基）・稲元久保（68基）・相原（40基）・池浦（2基）古墳群に約160基、山田川流域に須恵（5基）・須恵須賀浦（89基）・半田（12基）・平等地向原（77基）・城ヶ谷（61基）・平等寺原（9基）・平等寺（10基）三郎丸堂ノ上（12基）・三郎丸（15基）・陵巖寺宇土（21基）古墳群に約340基の合計500基前後が分布する。このうち、平等寺・城ヶ谷一帯に約190基が集中分布する。その主体部は、竪穴系横口式石室・横穴式石室・石棺系の小石室等からなる。一方、河東一帯では、久戸・稲元久保、須恵須賀浦にて横穴墓群が認められ、宗像において特異な地域である。このうちの大半のものに発掘調査がなされ、宗像にて調査密度が最も多い地区である。また、この一帯には、須恵器窯跡群が分布している。

赤間・吉武地区 釣川上流域に分布する一群で、武丸初瀬（20基）・武丸的場（20基）・吉留西上ノ原（9基）・吉留西中ノ尾（15基）・冨地原上瀬ヶ浦（24基）・冨地原山ノ後（10基）・冨地原大原（24基）・名残高田（26基）・徳重高田（24基）・冨地原梅木（26基）・武丸皆真庵（11基）・武丸中ノ坪（7基）・名残大原（17基）古墳群の約444基が周知される。但し、昭和54年以前の自由ヶ丘団地内の開発に伴う発掘調査がなされておらず、多くの古墳が消滅している。このうち、調査がなされたのは、名残遺跡群（仏祖・高田・楠木・小嶺）と武丸町添・武丸皆真庵がある。これらの墓域は、平野部の農耕基盤に基づく集団の古墳と考えられる。東郷・南郷地区と対比するまとまりがあり、共に小平野と水田を単位とするものである。

東郷・南郷地区 釣川中流城南岸に分布する一群で、高瀬川・朝町川流域の野坂入免（21基）・朝町中村（10基）・野坂中松元（21基）・朝町官作（13基）・野坂中（20基）・野坂塚ノ元（14基）・朝町百田A（13基）・浦谷（54基）・朝町百田B（13基）・朝町山ノ口（22基）・王丸清勢（14基）・王丸黒尾（10基）・王丸鎌田（20基）・大穂町ノ口（8基）などに約365基が確認される。東郷丘陵から大井丘陵に久原澤田（52基）・新屋（8基）・東郷（4基）・村山田高田（3基）・平井（5基）・大井三倉（10基）・大井割石（7基）などに約140基の合計505基が周知される。

このうち、調査されたものは、朝田妙見・朝町山ノ口・浦谷・久原澤田・大井

三倉・東郷古墳群などで、農耕基盤の中核部でありながら、実態は不明確な点が多い。その一因は、昭和40年代の東郷遺跡群、日の里団地造成に伴う古墳群・遺跡の消滅である。いずれにせよ、拠点集落である田能・東郷遺跡が立地しており、宗像の中核部と考えられる。

これらの後期群集墳は、釣川水系の宗像市域に1,495基の古墳が確認され、旧玄海町内の分布調査が不十分であり、今後の調査で100基以上は増加するだろう。また、西郷川流域では、ほとんど低丘陵に古墳があり、232基の古墳が確認される。旧津屋崎町内では、165基が周知される。おそらく、旧宗像郡内に推定2,000基の古墳が存在していたと思われる。

5-2-4.在地首長墓の動向

造墓Ⅰ期では、東郷高塚古墳・田久瓜ヶ坂1号墳と径30m前後の東郷高塚2号墳と径20m以下の円墳群に明らかな差が生じている。埋葬施設においては、高塚が割竹形木棺を被覆する粘土槨、径30mの一群が箱式石棺・割竹形木棺直葬、径20m以下もこれに類似した形態をとっている。また、農耕基盤の中心地の内陸部に前方後円墳の葬法が採用されている。造墓Ⅱ期(5世紀前半～6世紀初頭)の段階では、全長70m以上の、勝浦峯ノ畑古墳・勝浦井ノ浦古墳・新原奴山22号、生家大塚、在自剣塚古墳をその候補となる。また出土遺物によって、新原奴山22号→勝浦井ノ浦古墳→勝浦峯ノ畑古墳、在自剣塚古墳の首長権の流れとして理解した。造墓Ⅲ期(6世紀前半～7世紀初頭)は、全長60m以上の古墳4基から、天降神社古墳→須多田下ノ口古墳・在自剣塚・須多田ミソ塚古墳の系列を考えた。各期でその特性をみるならば、墳形、規模、埋葬施設によって格差が存在するようである。

造墓Ⅱ期は、規模において70m以上の首長墓、40～50mの前方後円墳の一群7基と、直径25～40mの円墳・方墳の3ランクの格差が生じている。大半のものが新原奴山古墳群の計画墓域へ集中していることも起因しているものと思われる。外部施設においても首長墓と40～50m級の前方後円墳に周壕や段築が普及している。埋葬施設は、概ねの古墳については不明だが、古式横穴式石室を採用する勝浦峯ノ畑古墳・新原奴山1号・須多田ニタ塚古墳があり、勝浦井ノ浦古墳の竪穴系横口式石室(前方部)を除くと、大半のものが横穴式石室系譜のものと考えたい。特に、前述したように海を意識した計画墓域がこの段階である。

造墓Ⅲ期は、60m以上の首長墓4基と、35～45m級前方後円墳7基、25～30m級前方後円墳6基の墳丘構成となっている。したがって、首長墓と他の14基の格差が明確である。その分布も、須多田の首長墓系譜と宗像一円の地勢圏分布となる。そして、群集墳の群構成に含まれるものが大半である。首長墓が横穴式石室を採用しているのに対し、スベットウ・田野瀬戸1号・4号墳・徳重高田16号・

城ヶ谷3号墳等が、竪穴系横口式石室あるいはその系譜を引く石室である。したがって、横穴式石室(久原Ⅱ-3号・田野桜3号・須恵クヒノ浦古墳)と竪穴系横穴式石室の二者が埋葬施設となっている。

造墓Ⅳ期は、胸形君徳善の墓と目される宮地嶽・手光波切不動古墳の首長墓と径30m前後の円墳である。同時期のものとして相原2号・田野桜3号墳等があげられる。内部主体は全て、巨大化した横穴式石室である。後者のものは、7世紀前半代に前方後円墳の消滅後に円墳としてあらわれるもので、また造墓Ⅲ期の前方後円墳分布圏に認められる。宮地嶽古墳の被葬者は、「胸形君徳善」の墓と推定する岡崎敬・渡辺正気・小田富士雄氏が、概ね肯定的されている(宗像大社復興期成会, 1979)。しかし、柳澤一男は、手光波切不動古墳が年代の方が胸形君徳善の没年代により近いことを指摘され再検討を促している(柳澤, 1991)。通説的な年代観に従えば、手光波切不動古墳の造墓時期とするのが、妥当と云える。しかし、古墳出土土器群の暦年代が今後、飛鳥の土器編年の確立に伴い、年代観が下れば宮地嶽古墳の造墓時期とも合致する可能性もある。ただし、この問題の解決は、考古学的には非常困難である。いずれにしろ、宮地嶽古墳→手光波切不動古墳→宮地嶽蔵骨器に続く被葬者が、後に「宗形朝臣」一連の血縁集団の首長であろうことは変りがなく、宗形郡司として大領・神主を世襲兼務することとなる。

宗像地域の首長墓は、須多田下ノ口古墳の前方後円墳を最後とし、さらに7世紀代に畿内色を強めた造墓がなされる点、朝鮮半島の百済をめぐるヤマト政権の直接的な関与に宗形氏が政治的色彩を強めて行くことになる。特に、関東地方では、7世前半代に切石系石室を含めた大型円墳・方墳が、後の有力氏族の領域と一致することが指摘され、ヤマト政権による東国経営のための「国造」の墓とする見解もある。宮地嶽古墳の被葬者は、北部九州にて同等の勢力を有し、政権中枢と繋がった政治勢力とみて誤りなからう(池ノ上・花田, 1999)。

5-2-5.生産工房

宗像地域では、須恵器窯跡・鍛冶工房・滑石玉作り遺跡などの手工業生産に関する遺構・遺物が発見されている。古墳時代の在地勢力の生産構造を示す重要な視点である。生産集落は、須恵器・鍛冶工人・玉作りなどの作業場とその工房を単位とするもので、厳密には工人のみの集落を構成することは少ない。内陸部の河東地区には須恵器窯が群集し、5世紀末～8世紀まで連続して操業がなされる。釣川遺跡では、窯壁片の出土から集積地の可能性がある(花田, 2002)。

須恵器生産 釣川内陸部に位置する須恵窯跡群は、近年20基からなる須恵須賀浦窯跡群の調査によって今後の議論が活発に予想されるため、再度まとめおきたい。

須恵窯跡群は、孔大寺山から西南派生する緩やかな丘陵上に分布する。窯跡は、稲元日焼原(5ヶ所)・稲元墨巡(13ヶ所)・稲元新池(4ヶ所)・須恵古池(7ヶ所)・稲元(1ヶ所・灰原)・須恵須賀浦(20ヶ所)・須賀浦北など50ヶ所で散布地等が周知されている。そのうち、須恵須賀浦で25ヶ所が調査されている。その分布は、稲元丘陵に開析する日焼原小支谷の中央部に日焼原窯跡、谷奥の小支谷に古池窯跡・新池窯跡・稲元墨巡窯跡・須恵須賀浦A区窯跡が立地する。その北側の相原支谷に稲元墨巡・大浦遺跡が位置する。クヒノ浦支谷は、谷奥に稲元窯跡が確認される。須恵須賀浦窯跡は、南群に23ヶ所・北群に数ヶ所が知られる。操業時期は、日焼原窯跡が小田編年ⅢA期～Ⅳ期、新池南・新池北窯跡ⅢA期～ⅢB期、墨巡・稲元・稲元墨巡・古池南窯跡ⅢB期を中心とする時期と考えられる。一方、中核の須賀浦窯跡はB区17ヶ所の大半のものがⅢ期であり、操業終了後の7世紀前半の横穴墓が造墓を開始している。このことから、工人集団の墓が横穴墓と考えられている。また、須恵古窯跡群の周囲に2～5kmに、山田井ノ上窯跡(7世紀末～8世紀前)・三郎丸堂ノ上C遺跡・陵巖寺寺ノ前(ⅣB期)・朝町木山窯跡(Ⅳ～Ⅴ期)・浦谷窯跡がある。日焼原窯跡は、尾根斜面に4ヶ所の窯跡と5ヶ所の竪穴が検出される。以上のように、須恵器窯の操業は、5世紀末～8世紀までで、6世紀後半～7世紀前半が中心時期にあたる。須恵器窯跡群では、福岡県最大の大野城市牛頸窯跡群に次ぐ規模である。

鉄器生産 集落・古墳から発見された鉄鋌・鍛冶具・羽口・鉄滓などがある。これらは、古墳前期の板状鉄斧から、奈良時代の鉄滓埋納までの遺構があり、連続した遺物が認められる(原,1997)。

集落では、鍛冶工房としては、5世紀後半～6世紀代に武丸高田・野坂一町間遺跡がある。規模的には、5世紀から6世紀前半まで小規模であり村方鍛冶と理解できる。これ以外に、勝浦井ノ口遺跡・勝浦穴田A遺跡・在自小田遺跡で、古墳時代中期～後期にかけての遺跡より鉄滓の出土が知られる。

鉄器生産の鍛冶具として、鉄鉗・鉄鎚・鑿・砥石などがある。宗像では、新原奴山1号墳・平等寺原5号墳・朝町山ノ口5・6号墳・手光南支群2号墳の5基が知られる。鍛冶具類は、新原奴山1号墳(鉄鉗1・鉄鎚2・鑿2)・朝町山ノ口5号墳(鉄鉗1・鉄鎚2)・6号墳(鉄鉗1・鉄鎚1)・平等寺原5号墳(鉄鉗1・鉄鎚3)の鍛冶具が出土する。新原奴山1号墳、前辻のごとく陶器TK208型式に比定される首長墓である。他のものは、6世紀末～7世紀前半の群集墳である。また、手光古墳群南支群2号墳から、鑿が出土している。古墳供献鉄滓は、相原E-1号墳・百田A-1号墳・B-2号墳・B区埋納遺構・浦谷H-4号埋納遺構・清田ヶ浦8号墳・須多田立石2号墳・須多田ニタ塚古墳において、検出される。概ね5世紀末～7世紀前半のものである

が、浦谷H-4号のように8世紀代のものも知られる。鉄滓供献の儀礼は、鉄生産・鉄器生産に係わる地域での祭祀儀礼である可能性が高い。

このようなことから、製鉄炉は現在のところ検出されていないが、鉄滓の分析結果から判断すると、遅くとも6世紀末前後に海岸部で開始された可能性がある。鍛冶工房で作られた製品の内容が明らかでないが、5～7世紀には操業が確認できる。鍛冶具も5世紀代のものが有力首長の副葬品となっており統括者と推定される。6世紀後半以降は、群集墳の有力家長層に副葬されており、操業担当者と考えられる。また、鍛冶具の副葬古墳に大型の鉄鎚・鉄鉗の存在から、6世紀後半以降の特異な鉄鏃と相俟って、大規模化した可能性が高い。

滑石製玉作り 玉作りは、滑石製品の未製品・製品の出土から、富地原神崎屋・釣川・練原・在自下ノ口遺跡などで製作が知られる。概ね、5世紀代を中心とするもので、粕屋郡の若杉山からの石材を用い、短期に製作されたとみる。昭和10年、田中幸夫の釣川遺跡の報告で、素材から製品までの工程が復元され、古墳時代中期後半とされる。富地原神崎屋遺跡は、滑石製未製品と白玉・有孔円盤・砂石が出土している。これらは、SK8の廃棄土壌や竪穴住居から出土しており、生産が行われている（宗像市教育委員会，1996）。滑石石材は、白玉・有孔円盤の原材と考えられる扁平な石材などが、3Kgほど出土している。したがって、滑石製作が容易であるため、粕屋地域の拠点集落から石材を入手し、製作されたと理解できる。共伴する須恵器により、5世紀末～6世紀初頭に生産が行われている。

ここで、注目されるのは古代祭場との関係である、祭祀位置が概ね決まった場所で行うものを祭場とし、他は祭祀遺跡とした。祭場は、沖ノ島、大島のロクドン・井浦川流域、田島の高宮遺跡などが知られるが、ヤマト政権の関与によるものである。祭祀遺跡としたものは、その把握が困難だが、大井和歌神社でも滑石製品が採集される。集落内祭祀は、有孔円盤・白玉・剣形石製品などで用いられるが、固定的な場所でなされるのか不明な点が多い。滑石製品は、これら祭祀に用いられたものであろう。

製塩 製塩土器は、古墳時代前期に神湊上方B遺跡が知られる。古墳時代後期～奈良時代に大島大岸、新波止貝塚、神湊上方A遺跡、生家釘ヶ下遺跡で行われる。一般的に外面にタタキ目を持つ甕であり、濃縮用の土器である。

津機能 津は、一般的に海岸の集落の船を泊める港のようなもので、「津・湊・泊」などと呼ばれる。集落の舟着き場程度のものでなく、常設性の高いもので、宗像では鐘崎の港が有名である。ここで云う津は、大規模な舟着き場程度のものである。津機能の設備として、小規模な石積み突堤などが遺構と確認できたものは少ないが、神湊浜宮、神湊新波止など多くの海浜に近い集落や入海の集落に存

在するものと推察される。

以上のように、鉄器生産・須恵器生産は宗像地域にて大規模に展開しており、福岡平野の生産工房群に次ぐ規模で、その様相は断絶がなく継続生産であり、墓制においても竪穴系横口式石室の系譜を残すものが多く存在するなど、他地域と性格を異にする。

6.奈良時代～平安時代

この時期は、天皇を頂点とする古代国家の形成期であり、平城京などの都城の整備に伴い、宗像郡衙・駅家などの文献史料との関連が注目される。特に、宗形郡司の大領（長官）の名前が知られ、神官を兼務する。宗形郡衙が発見されれば、この地域の解明が画期的に進むと考えられるからである。集落の発掘調査例が少ないが、敢えて取り扱うのは、中世宗像氏への移行が解明されるからである。

6-1.遺跡の様相

武丸大上げ遺跡 武丸久戸の東麓部に位置し大型掘立柱建物3棟が検出された。建物1は、2間×4間で、柱掘方が1m前後となる。3棟はコ字形の配置となる。出土の軒丸瓦は、単弁16弁蓮華文、軒平瓦は変形した均整唐草文である。時期は、8世紀後半～9世紀前半と考えられている。延喜式駅の候補地で「津日駅」の推定地する理解もある。正木喜三郎氏は、赤間院の郷倉とみる（宗像市教育委員会, 1985）。

三郎丸今井城遺跡 奈良時代後半の土壇内から、須恵器に伴い和銅開宝・万年通宝・神功開宝などが121枚出土した。共伴の須恵器甕片に「由加主□」のへう書きがあった。倭名抄の山田郷推定地にあたる（田中, 1998）。

王丸河原遺跡 奈良後半の柵列が検出されている。倭名抄の荒木郷推定地にあたる。

石丸坂へう遺跡 赤間宿の低丘陵の先端で大型掘立柱建物1棟が発見された。

野坂一町間遺跡 掘立柱建物5棟に伴い、円面硯・玄界灘式製塩土器が出土した。倭名抄の野坂郷にあたる。

徳重本村遺跡 須恵器に「国」と読めるへう書く土器が出土した。

富地原岩野A遺跡 掘立柱建物1棟と溝が検出され、8世紀前半に比定される。

田久瓜ヶ坂遺跡 田久丘陵（I区）で、8世紀の蔵骨器が出土している。

徳重本村遺跡 C区の土壇より、8世紀後半～9世紀前半の土器が出土する。

王丸梅ノ木谷遺跡 2区より土壇内に炭を詰めた中央部に杯蓋を控え、塊石を組

んでいる。9世紀とされる。倭名抄の荒木郷推定地にあたる。

奴山番田遺跡 I区の奈良時代の遺物を含む溝が検出された。倭名抄の辛家郷内にあたる。

須多田前田遺跡 須多田の小平野に位置し、掘立柱建物1棟が発見された。包含層より、タタキのある甕が出土する。奈良時代後半～平安初期と見られる。

在自下ノ原遺跡 古代の掘立柱建物が70棟前後存在する、広域な集落である。遺構の密度が高く、詳細が判明しないが、大規模な在自の拠点集落である。土器は、奈良～平安前期のものがある。倭名抄の荒自郷内にあたる（津屋崎町教育委員会, 1997）。

在自三本松遺跡 在自集落の山手にあたり20棟の掘立柱建物群が検出される。その中に総柱建物が土器の他に瓦が出土している。奈良時代末～平安前期の遺構群とされる。和名抄の在自郷内となる。倭名抄の荒自郷内にあたる（津屋崎町教育委員会, 1996）。

手光酒屋遺跡 大型の並列した2棟の掘立柱建物が検出された。遺物がなく、年代が判明しないが、この時期のものであろう。倭名抄の蓑生郷推定地にあたる（福岡町教育委員会, 集1996）。

上西郷クニサキ遺跡 遺物包含層が確認され、玄界灘式製塩土器・緑釉陶器が出土し、9世紀後半～10世紀前半とされる。

津丸五郎丸遺跡 8世紀末～9世紀の遺物包含層より、玄界灘式製塩土器・越州窯系青磁などの他に、沖ノ島と類似する滑石製勾玉が出土している。また、久末石原林遺跡では、越州窯系青磁・長沙窯系青磁が出土した。倭名抄の津九郷にあたる（松岡, 1973）。

蓮鳥遺跡 土壇内より「石足」のへう書きの土師器杯が出土している。

神興廃寺 福津市神興にある廃寺で、試掘調査で瓦類が出土した。宗像郡唯一の奈良時代寺院である。建立が8世紀中期以降で、延喜11年銘(911)の平瓦の出土は、瓦窯の存在が推定され、寺院の大改修・補修が行なわれたと推定される。神興神社の境内に移動した塔心礎がある。一般的に、宗形氏の氏寺と考えられている。倭名抄の津九郷推定地にあたる（福岡町教育委員会, 2000）。

畦町遺跡 福津市畦町の中央部に位置する。江戸時代に礎石の存在が知られる。近年、不明であった瓦出土地が判明した。寺院とされたが、最近は駅家の推定地とされる。

以上のように、調査例が少ないが、福岡地域に寺院・駅家推定地などがあり、越州窯系青磁などの出土が知られる。

高宮遺跡・宗像神社 田島高宮祭場周辺で滑石製馬形・舟形・白玉・土器類が

出土する。古墳時代中期から続く祭祀遺跡である。伝承によると社殿は、奈良時代末～平安時代初期に建立されたとする。祭祀にあたり、宗像郡衙推定地から離れており、宗形氏の祭祀に伴う施設が山麓部にある可能性が高い。神社以外の遺構の発見が待たれる。倭名抄の深田郷にあたる（花田, 2010）。

金崎港 奈良時代には、『続日本紀』神護景雲元年（767）に「筑前国宗形郡大領外従六位下宗形朝臣深津授 外従五位下。其妻無位竹生王外従五位下。並以被僧寿応誘 造金崎築瀬也。」の築港記事があり、宗形朝臣深津とその妻竹生王が、僧寿の進めで金崎に築瀬を造り、官位の昇格が知られる。金崎とあり、現在の鐘崎京泊あたりだろうと推定される。

『倭名類聚抄』に宗像郡に「秋・怡土・荒自・野坂・荒木・海部・席内・深田・蓑生・辛家・小荒・大荒・津九郷」の14の郷が知られる。その比定地は、亀井輝一郎氏の具体的考証がある。海部郷は鐘崎を含めた地域とされるが、伊藤彰氏は神湊以西の海辺を含む地域と考え、玄界灘沿岸部とみる。この見解は、神湊地域の浜宮貝塚・新波止貝塚などを重視し、本来の本貫地はこの一帯で、鐘崎の築港後に海人の移動を推定する（伊藤, 1985）。宗像海人については、『万葉集』巻16に神亀年間（724～729）宗形部津麻呂の航海に関する記述は、舵師として外洋航海技術の巧みさ伝えている。さらに、糟屋郡の白水郎荒雄、いわゆる志賀の海人とも協業関係にあり、対馬に物資を輸送した際の遭難記事が著名である。

6-2. 宗像郡衙の位置

奈良時代～平安時代前期の宗像郡の行政統治・管理施設である宗像郡衙は、大郡ということもあり、注目される遺構が発見されると考えられる。郡衙の位置については、三つぐらいの候補を考えてよいのではないかと思う。①福津市八並地域、②宗像市土穴「鍵の前」、③手光地域などが考えられる。

①については、宗像郡の郡寺（神興廃寺）・駅家（畦町遺跡）の推定から有力候補である。八並地名説は、歴史地理の木下正氏の地名説である（木下, 1998）。いずれにしても、太宰府に対面しての官道設置の理解と思う。②は正木喜三郎氏の論文によく出てくる説で、後の宗像神社の根本神領がこの一帯であり、「鍵の前」地名に基づくものである。正木喜三郎氏は、宗像庄の関係で重視されている（正木, 2004）。この説は明治時代の『大日本地名辞典』のような吉田東吾氏の説である。③は、手光酒屋遺跡の大型の掘立柱建物群が、7世紀後半～8世紀代のものと類似する。さらに、宮地嶽古墳・手光波切不動古墳に近い立地であり、位置的に問題はない。②の土穴説は、銅銭を百枚出土した三郎丸今井城遺跡が8世紀後半

に比定される。銅銭は出土数が全国的にも突出した出土量であり、私鑄銭（贗金）の可能性がある。通常、郡衙が同じ位置に長期間あるケースは全国的に少ない。例えば古い時期は①・③のいずれかにあり、新しい時期は②の可能性もある。郡衙は、位置の移動が知られており、①に継続して存在しなくても良い。

基本的には、宗像評衙→郡衙→宗像大宮司居館への移行の中で施設位置の変更と機能移転によるものである。宗像大宮司は、恐らく神官・社家などの祭り機能が宗像神社の政所、行政権機能が大宮司居館となると思う。B→Cの時期は平安時代中期以降と推察される（花田，2010）。留意されるのは、宗形氏の大領・神官の分離が奈良時代末にあります。評衙→郡衙は、同一地点でもかまわない。神興廃寺の建立が8世紀中期以降で、延喜11年(911)の平瓦の出土は、瓦窯の存在が推定され、寺院の大改修・補修が行なわれていたと見ることは妥当と思われる。恐らく、宗像大宮司の関与が推察されます。

また、江戸時代の『筑前国続風土記拾遺』の神興に「享和元年辛酉 六月十二日銅印一顆を得たり。難冠紐書跡古雅にして、古色愛しつべし。宗像社所蔵の勘合印また山田村増幅院にある所の氏雄の印に同様なり。」の記事は、この寺院の重要性を示すと思う（青柳，1864）。もし、Aの西郷川流域に宗像郡衙があるとすれば、律令国家の官道整備の奈良時代前期以降と推察されます。それ以前には、手光の評衙→郡衙でも良いような気がする。いすれにしても、詳細は不明である。但し、宗像郡大領は、宮地嶽古墳→手光波切古墳の被葬者の血縁集団と考えらる。行政統治の郡衙と祭場の宗像神社を統括しており、宗像郡衙の発見が待たれる。私は、神興・畦町・八並一帯に位置を推定する（花田，2010）。

また、津日駅家の推定も、上八地域（津日の浦）とする説、畦町説、武丸大上げ遺跡とする説がある。交通路としては、畦町遺跡説、武丸大上げ遺跡などが有力な候補であり、共に官衙的性格の強いものである。両者は瓦類を出土している。津丸五郎丸遺跡・蓮鳥遺跡は津丸郷内にあたり、神興廃寺（氏寺）の立地と相俟って、郡内でも律令国家の香りがするところである。一方、在自下ノ原遺跡・在自三本松遺跡は、荒自郷の中心集落であろう。

宮地嶽蔵骨器（ガラス製）は、原位置を保っていないため出土の詳細は明らかでないが、奈良時代初頭に宗形氏の宮地嶽奥ノ院付近に、墓域が周辺に存在したのである。被葬者は、史料にみる宗形朝臣等抒に比定する森貞次郎氏説や尼子娘の帰葬とする渡辺正気説の考えがある（森，1976・渡辺，1984）。いずれの意見も、墓誌の伴う文禰麻呂のガラス骨蔵器が、慶雲4年(707)のものであり、その形態が類似し宙吹き技法も共通することから、この頃のものとされる。尼子娘とみる見解も依然有力であることに変わりない。一方、文禰麻呂が正四位上、宗形朝臣

等抒が従五位上であり、明らかに官位差が存在する。奈良時代には、手光波切不動古墳に近接して氏寺である神興廃寺が建立され、搭心礎が残る。出土瓦は、いわゆる鴻臚館式瓦で占められ、8世紀中頃の創建と考えられる（高橋，1983）。また、畦町遺跡は礎石・古瓦を出土した古記録より、駅家の展開が西郷川流域に分布している。この二つの遺跡は、律令期の津丸郷内となろう。

神興神社の祭神に宗像三女神があり、古代寺院である神興廃寺の存在も相まって、興味深く、郡衙は周辺のような気がする。宗像神社大菩薩縁起には、「室貴六嶽」への三女神降臨伝承があり、神興が登場するのも興味深い。但し、縁起の成立は鎌倉時代末期と考えられている。宗像神社史には、直接的に宗像郡衙の位置を示す記述は確認できない。但し、宗像神社の周辺に祭祀に伴う、居宅あるいは政所の存在することは考えて良いと思う。恐らく、神社の史跡外、政所社あたりと考える。

7.宗形氏とヤマト政権

7-1.海民の地方神

弥生時代には、『魏志倭人伝』にみられるクニが、伊都国・奴国などの地域連合体の統合が進む中、このクニを特徴づける甕棺埋葬・大量の青銅器副葬墓の存在は宗像には顕著に現れない。したがって、北部九州外縁部として、早期には環濠集落などは出現が確認されるが、中期・後期には少数の青銅器副葬墓、列状土壙墓群などの墓制が思想を共通するものの、史料にもとづいて比定される伊都国・奴国の様相と異なる。後期には、玄界灘沿岸を掌握する伊都国連合の支配領域に含まれるとみる。

田熊石畑遺跡の青銅器の大量副葬は、弥生時代前期～中期前半に福岡平野などの遺跡と同様に地域的发展を遂げていたことが証明された。しかし、中期後半～後期には、現在のところ大規模な遺跡は少ないようである。日の里団地の開発で、この時期の遺跡群が消滅した可能性もあるが、基本的には地理的に農耕基盤の脆弱性が原因で釣川流域地域の政治的な成長に抑止が働いたのではなかろうか。

古墳時代早期（3世紀前～中）には、沖ノ島・今川遺跡・久原瀧ヶ下遺跡・富地原川原田遺跡・神湊上方・下高宮遺跡などで、庄内式併行期の土器が確認される。特に、今川・久原瀧ヶ下・富地原川原田遺跡で畿内の庄内式の精緻に模倣される器種が知られる。今川遺跡では、庄内式の他に山陰系・近江系の土器が検出される。近江系の甕は、近江湖東・湖北地域のものと考えられ、瀬戸内海交易ルート以外に、日本海（東海）の交易ルートを示すものとして注目される。この

時期は、福岡・糸島平野の在地首長とヤマト政権の前身勢力である邪馬台国連合の地域間交易・接触を示すものと考えられる。つまり、邪馬台国の時代に畿内（大和・河内）の影響を受けた模倣土器が多く出土する。神話「神武東征」の正反対の現象が起きている。つまり、邪馬台国の九州説は全く成立しないのであり、古事記・日本書記の神話に騙されてはいけない。

一方、沖ノ島の信仰は、玄界灘沿岸海民の外洋航海・避難島として、縄文前期・弥生中期・古墳早期の生活遺物が認められる。古墳時代前期前半までは、海民の地方神として息づいていたものとみる。

古墳時代前期前半までは、ヤマト政権の磯城・佐紀に墓域を形成した王権は糸島・早良・福岡・粕谷平野に早期以来の在地首長層と政治的結合・掌握を進めたことが、前方後円墳の造墓の様相から窺い知ることができる。前方後円墳集成1期～5期までの古墳が、糸島・早良平野で16基、福岡・粕谷平野に9基、遠賀川河口に5基、豊後灘に面した曽根平野に1基が確認できる。この分布の様相は、倭人伝の航海ルートとほぼ一致する。

7-2.ヤマト政権の航海神の昇華段階

古墳時代前期後半の沖ノ島祭祀開始される4世紀後半～6世紀前葉が、この時期にあたる。玄界灘沿岸海民の地方神がヤマト政権の関与により、宗像在地集団が航海神奉斎者を媒体に海民集団の組織化を図り、外洋・物資輸送など宗像首長層を取り込み、在地首長権を承認、海上航海権の直接的な掌握を進める段階とみる。

4世紀後半は、沖ノ島祭祀が開始される。東郷高塚古墳は全長62mで、宗像入海を見下ろす位置の造墓である。釣川河口に近い上高宮古墳は、後の高宮祭場の地にあたる。この時期の宗像の古墳は、遠賀川河口の磯部1号・塩屋・豊前坊1号に比べると、突出した規模ではない。

5世紀初頭～6世紀初頭は、古市・百舌鳥古墳群の被葬者が、ヤマト政権の中核勢力として、航海路の掌握を進める時期で倭の五王の時代にあたる。史料にみる「海北道中」として宗像の在地首長の古墳群に変化が現れる。玄界灘沿岸の津屋崎入海（桂潟）に、勝浦峰ヶ浦・勝浦井ノ口古墳、生家2号墳、新原奴山古墳群の形成が開始され、全長70～100m級の大型首長墓が出現する。宗像入海から、桂潟の津の成立と関連するとみられ、外洋航路の確保と交易が在地首長によって、進められたとみる。集落も在自遺跡群・勝浦練原遺跡群・生家釘ヶ崎・奴山遺跡群などの、海浜集落の盛行が確認できる。田島の中殿山祭祀が確認でき、高宮祭祀の上限とみる。

玄界灘沿岸の前方後円墳の首長墓は、5世紀前半に首長墓系列の断絶が知られる。新たに出現する系譜は、宗像系列が顕著であるが、他の系列は古墳規模が30～40m級のものが多い。このことは、沖ノ島の航海神を奉斎する玄海灘海民集団の盟主に宗像首長層が権力を掌握したとみる。一方、ヤマト政権は、筑後川水系の月ノ岡・塚堂古墳の吉井、御塚・権現塚古墳の三潞地域の掌握が指摘される。

7-3.ヤマト政権の地域施策推進と関与

6世紀中葉の玄海灘の航海権を掌握したヤマト政権は、環有明海首長連合の盟主筑紫・磐井との航海路の掌握をめぐり、対峙・抗争となり、史料にみる「磐井の乱」となって現れる。環有明海の首長連合は、5世紀前～中葉に急速に朝鮮半島への独自の航海路・物資輸送・船舶の確保などを、持っていたとみられる。この勢力範囲は、「筑紫・火・豊」を含むと考えられるが、筑後・肥後を中心に線的に交通の要衝を掌握したとみる。乱に伴い宗像首長の位置が、ヤマト政権と筑紫君磐井政権の中立的立場とする見解がある。しかし、宗像首長層の造墓、群集墳の連続性から考えると、ヤマト政権の傘下とみる。それは、筑紫君磐井政権が「糟谷」に拠点を持っていたとされるが、農耕基盤であり、玄海灘沿岸海民集団を掌握していたとは考えない。乱後、6世紀後半には、「糟谷屯倉」・「那津官家」の設置が史料にみられる。この時期に、囲柵建物群が比恵・有田・鹿部田淵遺跡が玄界灘沿岸の遺跡で検出され、初期官衙的性格が指摘される。ヤマト政権の直接支配拠点として、物資の集積・津港などの交通・軍事的要衝に設置された。宗像などの在地首長を媒介としない、中央政権の政治・軍事拠点となる。宗像の首長墓は、奴山・大石・須多田系列が9基、全長60～100m級の前方後円墳が知られる。それは、天降神社・須多田ミソ塚・須多田上ノ口・須多田下ノ口・在自剣塚古墳・奴山12号・30号墳・大石岡ノ谷1号・2号墳などである。これらの様相から、筑紫の地域支配への参画に積極的に加担したとみる。田熊石畑遺跡は、このような情勢下で成立したものであり、宗形氏の経済的基盤を支えた倉庫群と考える。玄界灘沿岸では、博多湾の今津の港に今宿大塚古墳（全長64m）、比恵遺跡に近い東光寺剣塚古墳（全長75m）が造墓されることから、ヤマト政権に協力した在地首長とみる。特に、磐井の乱後に大野城市牛頸窯の生産が拡大することや砂鉄原料の鉄生産の盛行は、ヤマト政権の地域生産集団の再編と技術移転などの地域掌握の政策とみる。

7世紀初頭～7世紀中葉には、「筑紫大宰」が史料にみられ、ヤマト政権を構成する中央豪族の派遣も確認でき、朝鮮半島への航海路拡大と維持から軍事拠点としての性格が強くなる。宮地嶽古墳は、畿内の中央豪族墓を凌ぐ規模・構造・副

葬品から、沖ノ島の航海神の奉斎・船舶の統率・軍事指揮などの諸権力を統括していたとみる。このことが、大海人皇子と尼子娘の婚姻関係を生じたとみる。造墓は、宮地嶽古墳が孝極・孝徳朝、手光波切不動古墳が斉明朝前後の年代を想定する。

7-4.大宰府設置に伴う地方官人化

政治拠点の大宰府の設置に伴い、道路・港湾の整備が一層進められ、宗形氏も朝鮮半島の軍事的参画が進む。高市皇子は、壬申の乱における大海人皇子軍の最大の功労者として著名である。この天武2年（673）以前に「胸形君」が個人として史料に登場することはなく、高市皇子の活躍が正史に反映されたものとみなされている。『日本書紀』天武13年（684）の条に八色の制の制定に伴い、52氏の「朝臣」の賜姓の中で、九州では「胸形君」だけである。律令国家の確立に伴い、和銅2年（709）～弘仁4年（813）に宗形朝臣の郡司の人名が知られる。和銅2年には、宗像郡司に同一親族の三等以上の連任が許され、延暦17年（798）に郡司・神主の兼帯が知られる。これは、高市皇子につづく長屋王などの政治的地位が起因したとみる。平城京長屋王宅の付札木簡は、宗形郡宗形大領等抒より、送られたと考えられる。沖ノ島の航海神祭祀は、高宮祭祀でも認められ、辺津宮社殿建立される8世紀後半まで行われていたとみる。

一方、和銅2年に筑前国御笠郡司として、「宗形部堅牛」が益城連姓を賜ったことが『続日本紀』にあり、北部九州での官人の活躍を知る具体例として注目される。さらに、玄界灘沿岸の嶋郡川辺里の戸籍、大宝2年（702）に宗形部を名乗る人の存在があり、6～7世紀の海上交通掌握に伴う海民の婚姻・移動の末裔とみることもできる。

以上のような、各段階を経て宗像氏の成長とヤマト政権の北部九州の地方政策が成し遂げられると考える。

参考文献

青柳種信『筑前國續風土記拾遺』1864

安部裕久「弥生時代」『宗像史市 通史編』第1巻 考古・自然 宗像市史編纂委員会 1997

池ノ上宏「宗像における前方後円墳の終焉」 第43回埋蔵文化財研究会 1998

池ノ上宏・花田勝広「筑紫宮地嶽古墳の再検討」『考古学雑誌』85巻1号 1999

石山勲ほか『新原・奴山古墳群』福岡県文化財調査報告書 第54集 1977

- 伊藤彰「鐘崎と海人文化」『海と列島文化 玄界灘の島々』小学館 1985
- 貝原益軒『筑前國續風土記』1703
- 鏡山猛「甕棺累考」『九州考古学論攻』1972
- 亀井輝一郎「ヤマト政権と宗像」『宗像史市 通史編』第2巻 古代・中世郎 宗像市史編纂委員会 1998
- 木下良「律令制下における宗像郡と交通」『宗像史市 通史編』第2巻 古代・中世郡 宗像市史編纂委員会 1998
- 桑田和明『中世筑前国宗像氏と宗像社』岩田書院 2003
- 酒井仁夫ほか『久戸古墳群』宗像町文化財調査報告書 第2集1979
- 酒井仁夫・伊崎俊秋『今川遺跡』津屋崎町文化財調査報告書 第4集 1981
- 島田寅次郎「石器と土器・古墳と副葬品」『福岡県史蹟名勝報告書』13 1939
- 清水比呂之「縄文時代」『宗像史市 通史編』第1巻 考古・自然 宗像市史編纂委員会 1997
- 下山正一「釣川平野の発達史」『宗像史市 通史編』第1巻 考古・自然 宗像市史編纂委員会 1997
- 白木英敏『田熊石畑遺跡発掘調査概報』宗像市教育委員会 2009
- 白木英敏『江口海岸の縄文遺跡』「むなかた電子博物館」紀要第2号 2010
- 高橋章「鴻腫館系瓦の様相」『大宰府古文化論叢』下巻 吉川弘文館1983
- 田中正日子「律令支配体制の動揺と宗像」『宗像史市 通史編』第2巻 古代・中世郎 宗像市史編纂委員会1998
- 田中幸夫「筑前宗像郡釣川の遺跡」『日本先史土器論』1935
- 田中幸夫「北九州の縄文土器」『考古学雑誌』26-7 1936
- 田中幸夫「官幣大社宗像大社辺津宮と祭祀遺物」『考古学雑誌』28-1 1938
- 垂水 康・中村修身「宗像郡鐘ヶ崎（上八）貝塚出土遺物」『地域相研究』7号 地域相研究会 1979
- 垂水 康・中村修身「骨製耳飾りについて」『地域相研究』15号 地域相研究会 1984
- 筑紫野史学研究会編『浜宮貝塚調査概報』1971
- 津屋崎町教育委員会『宮司井手ノ上古墳』津屋崎町文化財調査報告書 第7集 1991
- 津屋崎町教育委員会『宮司大ヒタイ遺跡』津屋崎町文化財調査報告書 第8集 1993
- 津屋崎町教育委員会『在自遺跡群Ⅰ』津屋崎町文化財調査報告書 第10集 1995
- 津屋崎町教育委員会『在自遺跡群Ⅱ』津屋崎町文化財調査報告書 第11集 1996
- 津屋崎町教育委員会『須多田古墳群』津屋崎町文化財調査報告書 第12集 1996
- 津屋崎町教育委員会『在自遺跡群Ⅲ』津屋崎町文化財調査報告書 第13集 1997
- 津屋崎町教育委員会『勝浦北部丘陵遺跡群』津屋崎町文化財調査報告書 第14集 1998
- 津屋崎町教育委員会『練原遺跡』津屋崎町文化財調査報告書 第15集 1999
- 津屋崎町教育委員会『勝浦』津屋崎町文化財調査報告書 第16集 2000

- 津屋崎町教育委員会『津屋崎古墳群Ⅰ』津屋崎町文化財調査報告書 第20集 2004
- 中村修身「縄文時代大珠について」『地域相研究』11号 地域相研究会 1982
- 西日本文化協会『福岡県史 近代史料編福岡県地理全誌(二)』1981
- 橋口達也『石丸遺跡』宗像町文化財調査報告書 第4集 1980
- 橋口達也『新原・奴山古墳群』津屋崎町文化財調査報告書 第6集1 1989
- 波多野院三ほか『東郷遺跡群』日本住宅公団 1967
- 波多野院三『城ヶ谷古墳群』福岡教育大学歴史研究部考古学班 1977
- 花田勝広「筑紫宗像氏と首長権」『地域相研究 20』地域相研究会 1991
- 花田勝広「宗像郷土館の研究」『古文化談叢』30号(上)九州古文化研究会 1993
- 花田勝広「宗像郷土館の研究 幻の青銅武器をもとめて」『滋賀考古』14号 滋賀考古学研究会 1994
- 花田勝広「沖ノ島祭祀と在地首長の動向」『古代学研究』146号 古代学研究会 1999
- 花田勝広「筑紫宗像の生産工房」『田辺昭三先生古稀記念論文集』2002
- 花田勝広「古代・中世の宗像神社と宗像氏居館」『宗像考古』8号 2010
- 原俊一「古墳時代」『宗像史市 通史編』第1巻 考古・自然 宗像市史編纂委員会1997
- 原田忠昭・小川俊郎1955「福岡県宗像郡鐘崎上八貝発掘の人骨」『解剖学雑誌』30-3・4 1955
- 日野尚志「筑前国宗像郡の条里」『地理科学』8号1967
- 平田幸治「旧石器時代」『宗像史市 通史編』第1巻 考古・自然 宗像市史編纂委員会 1997
- 福岡町教育委員会『手光酒屋遺跡』福岡町文化財調査報告書 第10集 1996
- 福岡町教育委員会『福岡町史 通史編』2000
- 埋蔵文化財研究会『前方後円墳の終焉』第43回埋蔵文化財研究集会 1998
- 正木喜三郎『古代・中世 宗像の歴史と伝承』岩田書院 2004
- 松岡史ほか『福岡バイパス関係埋蔵文化財調査報告』福岡県文化財調査報告書 1973
- 宗像考古刊行会『田中幸夫と宗像郷土館』宗像郷土館考古資料調査報告 1994
- 宗像市教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概要』宗像市文化財調査報告書 第7集 1984
- 宗像市教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報告書』宗像市文化財調査報告書 第9集 1985
- 宗像市教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概要』宗像市文化財調査報告書 第10集 1986
- 宗像市教育委員会『大井三倉遺跡』宗像市文化財調査報告書 第11集 1987
- 宗像市教育委員会『久原遺跡』宗像市文化財調査報告書 第19集 1988
- 宗像市教育委員会『東郷高塚Ⅰ』宗像市文化財調査報告書 第21集 1989
- 宗像市教育委員会『名残Ⅱ』宗像市文化財調査報告書 第25集 1990
- 宗像市教育委員会『久原Ⅲ』宗像市文化財調査報告書 第26集 1990
- 宗像市教育委員会『名残Ⅳ』宗像市文化財調査報告書 第29集 1991

- 宗像市教育委員会『富地原川原田』宗像市文化財調査報告書 第39集 1994
宗像市教育委員会『富地原神崎屋』宗像市文化財調査報告書 第41集 1996
宗像市教育委員会『田久松ヶ浦』宗像市文化財調査報告書 第47集 1999
宗像市教育委員会『田久瓜ヶ坂』宗像市文化財調査報告書 第46集 1999
宗像市教育委員会『久原瀧ヶ下』宗像市文化財調査報告書 第48集 2000
宗像市教育委員会『東郷登り立』宗像市文化財調査報告書 第51集 2001
宗像市教育委員会『徳重本村』宗像市文化財調査報告書 第52集 2002
宗像市教育委員会『桜京古墳』宗像市文化財調査報告書 第58集 2005
宗像市教育委員会『田野瀬戸古墳』宗像市文化財調査報告書 第59集 2007
宗像神社復興期成会編『宗像神社史』上巻 1961
宗像神社復興期成会編『宗像神社史』下巻 1966
宗像大社復興期成会編『宗像・沖ノ島』1979
森貞次郎『北部九州の古代文化』明文社 1976
柳澤一男『筑前』『前方後円墳集成 九州』前方後円墳研究会1991
渡辺正気ほか「特集 古代の宗像」『歴史手帳』13巻9号 名著出版 1984